

先生方とともに
高校生の今と未来をつなぐ

〈ビュー21〉

高校版

2018
Volume 1

4月

VIEW21

新教育時代、幕開け

特集

「大学入学共通テスト」初実施学年が入学

3つの教育課題に どう取り組むか

改革事例から学ぶ！
「学校教育デザイン」を描く道標
青森県立青森高校

主体的・対話的で深い学びへ
実践 アクティブ・ラーニング

古典 石川県立松任高校 米林舞子
数学 鹿児島県立鹿屋高校 中山育郎

指導変革の軌跡
東京都立富士高校・附属中学校
岐阜県立中津高校

心に種をまく

先生 「総合的な学習の時間」に行った、「自分が県知事になったら沖縄の課題をどう解決するか」をテーマとした4時間の探究活動は、先生にとって新しい試みでした。みんなにとってはどんな授業でしたか？

生徒 授業では1つの課題について深く調べましたが、その原因がほかの課題と絡み合っていると分かり、物事を表面的にしか捉えていなかった自分に気づきました。その後は、寮にある新聞に目を通し、気になる記事は2紙を読み比べるようになりました。

生徒 心に残っているのは、在日米軍基地に関する発表です。本当に大きな課題なのでクラス中が戸惑っていたけれど、友人の切実な声を聞いて自分事として考えられるようになったし、発表後の質疑応答を通じて、住む地域によって関心度が違うことに驚きました。

先生 本校には県全域から生徒が入学して来るから、地元の人でなければ分からないことを教え合うことで、県としての課題を多様な視野から見られて、さらに深く考える機会になったよね。

生徒 私たちの班では、雇用や貧困、肥満、環境保護など9つもの課題が挙がりました。たくさんの課題が

あるのはなぜかと話し合っていくうちに、根本的な要因として学力の課題にたどり着きました。そうならば、私たちにできるのは、自ら努力して学力を上げ、県の教育をも変えていくことだという結論になりました。

生徒 私も教育に対しての関心が高まり、海外の教育について知りたいと考え、学校教育が先進的だと聞いたオランダに留学することにしました。留学にあたって応募書類を書く時には、先生の授業で学んだ思考ツールを活用しました。言いたいことを全部付箋に書いてから内容や優先度で分類すると、考えをすっきり整理でき、留学への思いが明確に伝わる文章を書けたと思います。高校入学時から目指していた留学なので、8月から1年間、いろいろ学べます！

生徒 留学や進学、就職などで一度は県を出ることになるとは思うけれど、いろいろな経験を積み重ねて、大きく成長して、また沖縄に戻って来たいです。

先生 一人ひとりのそうした思いが、時間がかかっても課題解決に結びつくのだと信じています。授業がみんなの大きな成長につながっていると分かり、また新たな挑戦をする勇気が出てきたよ！

長島 誠先生 教職歴14年。同校に赴任して7年目。進路指導部。総合的な学習の時間担当。

沖縄県立向陽高校 全日制／普通科・国際文科・理数科／共学／1学年約240人／2017年度入試合格実績（現役のみ）国公立大は、東北大、名古屋大、琉球大などに119人が合格。私立大は、早稲田大、関西学院大、沖縄国際大などに延べ109人が合格。

2 特集

「大学入学共通テスト」初実施学年が入学

3つの教育課題に どう取り組むか

4 3年後の希望進路の実現に向け、
重要となる3つの教育課題とは

6 実践事例

育成を目指す資質・能力の明確化と共有を土台とした
3つの教育課題に取り組む
3校の実践

7 事例1 茨城県立下妻第一高校

各分野・単元で育成する資質・能力を明確にした教育課程表を作成し、全校で授業改善に臨む

10 事例2 長野県上田高校

自校の教育のあり方を明確にした上で教育活動を見直し、学校改革に取り組む

13 事例3 京都府・私立京都産業大学附属中学校・高校

教育の不易と流行の観点から、組織的に授業改善に取り組む仕組みを構築

今月の表紙メッセージ

新教育時代、幕開け

◎新年度がスタートしました。入学式や新入生歓迎行事など、この時期の主役と言えば、高校1年生ですが、例年以上に今年度の1年生には注目が集まっていると思われます。3年後の2020年度に初めて実施される「大学入学共通テスト」を受験する学年であるというのがその理由ですが、単に新しいテストが実施されるだけではなく、同テストで求められるものがこれまでのテストとは大きく異なる点にも、注目を集める理由があります。同テストで求められるもの、すなわち「資質・能力」の育成は22年度に実施される次期学習指導要領から本格化しますが、新たな高校教育の時代は、18年度1年生の入学とともに始まったと言えるのではないのでしょうか。

『VIEW21』高校版
編集長 柏木 崇

16 改革事例から導く! 「学校教育デザイン」を描く道標

17 青森県立青森高校

育成を目指す資質・能力を「資質・能力の3つの柱」「綱領」の観点で集約し、諸活動にプロットする

20 主体的・対話的で深い学びへ 実践 アクティブ・ラーニング

20 古典

石川県立松任高校 米林舞子

登場人物の言動や情景に込められた心情を、深く理解できる資質・能力を養う

24 数学

鹿児島県立鹿屋高校 中山育郎

すべての生徒が理解するまで徹底的に待つ指導で、「分かった」という気持ちを喚起

28 指導変革の軌跡

28 東京都立富士高校・附属中学校

進学実績向上

「富士山型の人間形成」を図る指導で、5教科の総合的な学力向上を実現

32 岐阜県立中津高校

キャリア教育

体系的な進路探究活動とボランティア活動で、主体的な学習集団を育成

36 改良! 指導ツール ビフォーアフター

2年生 1学期

模試への意識づけシート

40 大学生による高校生のための 大学の学び 最新ナビ

40 会津大学 コンピュータ理工学部

技術力に加え、異文化適応力や
創業の精神を備えた人材を育成する

42 関東学院大学 経営学部

サポーター企業と連携し、
理論と実践を融合しながら学ぶ

44 これからの会議・研修のあり方、つくり方

会議・研修の司会・進行役の
先生方の質問に答えます!

46 VIEW'S REPORT

福岡県立学校「新たな学びプロジェクト」
体験中心の発表会や研修で、
新たな学びの裾野を広げる

52 Reader's VIEW

巻末 教師を育てた言葉たち

「変化をすぐに求めるな」

神奈川県立横浜南陵高校 半田昌孝

<http://berd.benesse.jp>

本誌記事は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでもご覧いただけます

印刷製本/(株)協同プレス 編集協力/(有)ペンダコ 執筆協力/中丸 満、二宮良太、長谷川 敦 撮影協力/荒川 潤、川上一生、福山 哲、南 弘幸、ヤマガチイキ

*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます

*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます

©Benesse Corporation 2018

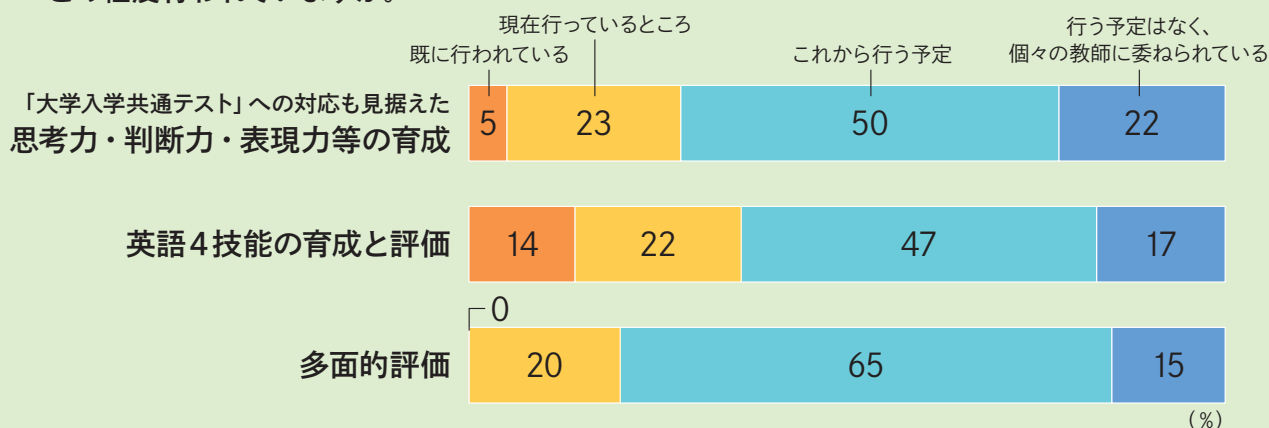
「大学入学共通テスト」初実施学年が入学 3つの教育課題に どう取り組むか

2018 年も新年度がスタートしたが、今年度の高校1年生には例年以上に注目が集まっている。それは、現在進行中の高大接続改革における大学入学者選抜の施策の多くが、最初に実施される学年だからだ。

大学入試センター試験に代わる「大学入学共通テスト」の実施、
同テストの枠組みにおける民間の英語の資格・検定試験の活用、
そして、調査書の様式の変更を始めとする多面的・総合的な評価への転換など、
18 年度入学生がかかわる大学入試の変化は多岐にわたり、高校現場にはその対応が求められる。
今号は、中でも重要な3つの教育課題に着目し、先進校の事例から取り組みのヒントを探る。

3つの教育課題への取り組み状況

Q 次の教育課題について、新高1生に対する指導の方針・方法・計画の組織的な立案は、どの程度行われていますか。



出典／『VIEW21』高校版読者モニターへのアンケート結果（アンケートは、2018 年2月にウェブとファクスで実施。回答数は104）

本号のテーマ

新高校1学年はどのような教育課題に直面し、 その課題にどのような方針で取り組めばよいのか

1 生徒の希望進路実現のために取り組むべき3つの教育課題

【P.4～5】

- ◎ 2018年度の高校1年生は、20年度に初めて実施される「大学入学共通テスト」を受験する。同テストでは、各教科・科目の知識・技能とともに、思考力・判断力・表現力が中心に問われる。
- ◎ 同テストの枠組みにおいて、英語は、民間の英語の資格・検定試験の活用を通して英語4技能が評価される。
- ◎ 個別大学の入試も、20年度から入試区分の名称が改められ、そのいずれの区分でも学力の3要素を多面的・総合的に評価する内容へと転換される。



「思考力・判断力・表現力等の育成」「英語4技能の育成と評価」「多面的評価」
への対応が、生徒の希望進路実現の鍵を握る

2 3つの教育課題に取り組む3校の実践

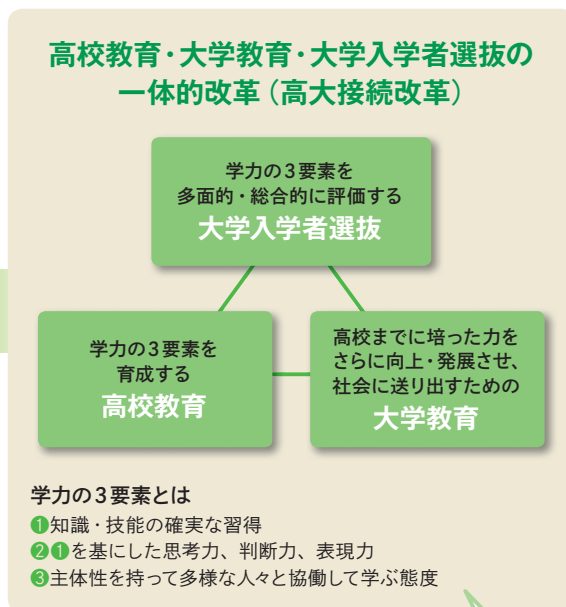
	事例 1 しもつよ 茨城県立下妻第一高校 【P.7～9】	事例 2 長野県上田高校 【P.10～12】	事例 3 京都府・私立 京都産業大学附属 中学校・高校 【P.13～15】
3校の共通点	まず、生徒に育成する資質・能力を明確化		
1 思考力・判断力・ 表現力等の 育成	各分野・単元の学習内容と育成する資質・能力の関係を明確化した教育課程表を教科・科目ごとに作成。それを基に、教師個々で授業改善を実践	互見授業週間を全教科の研究授業週間とし、互見授業を通年の実施に。定期考査では、全教科で論述問題を必出にした	「アクティブ・ラーニング・パターン〈教師編〉」(*)を活用して、授業の実態と課題を明らかにし、ALの視点を取り入れた授業改善を推進
2 英語4技能の 育成と評価	4技能別のCAN-DOリストを作成し、3年間の各時期での到達目標を明確化。4技能の力を測るため、17年度からベネッセの「GTEC」を導入	英語4技能を総合的に伸ばすよう活動を工夫し、その成果を「GTEC」で継続的に測定	スピーキング強化の一環として、18年度の1学年からオンラインの英会話レッスンを導入。進学コースのみだった「GTEC」の受検を、全コースに拡大
3 多面的評価	課題研究などで実践してきたポートフォリオの活用を全校で進めようと、17年12月に勉強会、18年1月に全教師参加の研修会を実施	文部科学省「スーパーグローバルハイスクール」の活動で行ってきた多面的評価を、他教科に広げる手法を模索	評価対象を課外活動や個人活動などにまで広げるため、18年度の早い段階でeポートフォリオを導入できるように検討

* 株式会社クリエイティブシフトと株式会社ベネッセコーポレーションが共同開発した教師用教材。詳細はP.14参照。

3年後の希望進路の実現に向け、 重要となる3つの教育課題とは

2020 年度から実施される「大学入学共通テスト」を最初に受験するのが、18 年 4 月に入学した高校 1 年生だ。
3 年後の希望進路を実現するための指導を考えるにあたり、大学入学者選抜改革の内容と課題を整理する。

1 年次 2018			
10～11月	7～9月	6月末	年度中
「高校生のための学びの基礎診断」 測定ツール公表	「高校生のための学びの基礎診断」 測定ツール審査	「高校生のための学びの基礎診断」 測定ツール申請締め切り	各大学の入学者選抜方法等の 予告・公表



各大学の個別選抜に新たなルールが設置され、 すべての入試区分で多面的・総合的な評価を実施

- ◎「総合型選抜」（現在の AO 入試）、「学校推薦型選抜」（現在の推薦入試）では、小論文、プレゼンテーション、教科・科目に係るテスト、「大学入学共通テスト」等のうち、いずれかの活用を必須化。
- ◎調査書の記載内容を改善。両面 1 枚の制限も撤廃し、より弾力的に記載できるように。
- ◎出願時期を「総合型選抜」は 8 月以降から 9 月以降に変更。合格発表時期を「総合型選抜」は 11 月以降、「学校推薦型選抜」は 12 月以降に設定（これまでルールなし）。

改革の背景

- ◎国際化、情報化の急速な進展により、社会構造が急速に、かつ大きく変革している。
- ◎知識基盤社会の中で、新たな価値を創造していく力を育てることが必要。

改革の目的

- ◎そうした変化する社会において自立的に活動するために必要な「学力の 3 要素」をバランスよく育む。

*文部科学省「高大接続改革の動向について」（2017 年 1 月）、同「高大接続改革の実施方針等の策定について」（2017 年 7 月）を基に編集部で作成

思考力・判断力・表現力、
英語 4 技能が問われる入試に

高大接続改革は、学力の 3 要素を育成・評価するために、高校教育・大学教育・大学入学者選抜を一体的に改革するものだ。2018 年度高校入学生が直接影響を受けるのは、「高校生のための学びの基礎診断」「大学入学共通テスト」「個別大学における入学者選抜改革」であり、後者の 2 つは、生徒の進路にかかわる、いわゆる「大学入学者選抜改革」だ。センター試験に代わって 20 年度から実施予定の「大学入学共通テスト」では、出題教科・科目等は現行から変更はないものの、各教科・科目の知識・技能とともに、思考力・判断力・表現力を評価する問題が中心となる。その象徴とも言えるのが、国語と数学での記述式問題の導入だ。そして、英語では、4 技能評価を行うため、「大学入試英語成績提供システム」に参加する民間の英語の資格・検定試験を活用する。

どの入試区分でも多面的・
総合的な評価を行う仕組みに
個別大学の入試では、「一般入試」

2024年度、次期学習指導要領を
前提に改革がさらに進行

地理歴史・公民分野や理科分野等でも
記述式問題を導入する方向で検討。

2021		3 年次	2 年次		2019	
1 月	5 月	2020 4～12 月	年度中	4 月	初頭	11 月
「大学入学共通テスト」実施		「大学入学共通テスト」の枠組みにおいて活用される英語の資格・検定試験の実施 ◎実施に向けて、各試験団体には、検定料の負担軽減方を講じることが求めるとともに、各大学には、受検者の負担に配慮して、できるだけ多くの種類の資格・検定試験の活用を求める。	「大学入学共通テスト」確認・プレテストの実施	「高校生のための学びの基礎診断」本格的な活用開始	「大学入学共通テスト」実施大綱の策定・公表	「大学入学共通テスト」試行調査（プレテスト）実施

「大学入学共通テスト」の注目点①

国語と数学で、思考力・判断力・表現力等を測る
記述式問題を導入

- ◎国語では、古文・漢文を除いた内容から 80 ～ 120 字程度で解答する問題を含め 3 問程度、マークシート式問題とは大問を分けて出題される予定。試験時間は、マークシート式問題と合わせて 100 分程度。数学では、「数学Ⅰ」の内容から数式・問題解決の方略などを問う問題 3 問程度、大問中にマークシート式問題と混在して出題される予定。試験時間は、マークシート式問題と合わせて 70 分程度。
- ◎大学入試センターが作問、出題、採点。採点には民間事業者を活用。

「大学入学共通テスト」の注目点②

民間の英語の資格・検定試験を活用し、
英語 4 技能を評価

- ◎民間事業者が実施する英語の資格・検定試験を活用し、英語 4 技能を評価。
- ◎「大学入試英語成績提供システム」に参加する資格・検定試験を、各大学の判断で活用。高校 3 年 4 ～ 12 月に 2 回まで受検可能。
- ◎「大学入学共通テスト」の英語試験は、「大学入試英語成績提供システム」に参加する資格・検定試験の実施・活用状況等を検証しつつ、2023 年度までは継続して実施。

「AO入試」「推薦入試」という従来の区分を、「一般選抜」「総合型選抜」「学校推薦型選抜」に改める。それは単なる名称変更ではなく、内容も変わる。一般選抜では、各大学が「入学者受入れの方針」（アドミッシヨン・ポリシー）に基づき、様式が見直される調査書や志願者本人が記載する資料等も含めて、多面的・総合的に評価する。総合型選抜・学校推薦型選抜では、小論文、プレゼンテーション、教科・科目に係るテスト、「大学入学共通テスト」等のうち、いずれかの活用を必須化する。そのようにして、すべての入試区分で多面的・総合的に学力の 3 要素を評価する大学入学者選抜に転換が図られる。

以上の内容の下で初めて行われる大学入試を最初に受験する、18 年度高校入学生希望進路の実現には、

① 思考力・判断力・表現力等の育成
② 英語 4 技能の育成と評価
③ 多面的評価

への対応が鍵を握る。実際、それらの課題に既に着手または着手予定の学校も多い（P.2）。各校はそれぞれの教育課題にどのような方針を立て、取り組もうとしているのか。次ページから 3 校の実践を見ていく。

育成を目指す資質・能力の 明確化と共有を土台とした 3つの教育課題に取り組む 3校の実践

大学入学者選抜改革の内容が具体化し、「思考力・判断力・表現力等の育成」
「英語4技能の育成と評価」「多面的評価」への対応が大きな鍵になることが分かってきた。
2018年度の高校1年生には、
3年後の大学入試に向けて今からどのような指導をしていくことが必要なのか。
3つの教育課題に既に着手した3校の実践からそのヒントを探る。

事例 1

茨城県立 下妻第一高校



◎教育方針に「文武不岐・人間力を磨く」を掲げ、文（学習）と武（部活動）を分けずに一体となって優れた人格形成を目指す。2016年度から、茨城県教育委員会「一人一人が輝く活力ある学校づくり推進事業」の重点校。

◎設立 1897（明治30）年

◎形態 全日制／普通科／共学

◎生徒数 1学年約280人

◎2017年度入試合格実績（現浪計） 国公立大は、東北大、茨城大、筑波大、東京大、東京工業大などに121人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、中央大、東京理科大、明治大、早稲田大などに延べ588人が合格。

◎URL <http://www.shimotsuma1-h.ibk.ed.jp>

事例 2

長野県 上田高校



◎スクール・アイデンティティーに「試百難（困難から逃げない、周到な準備をする、最後まで粘り抜く）」を掲げる。上田藩主居館跡地にあり、門・堀・濠は市の文化財。2015年度から文部科学省「スーパーグローバルハイスクール」の指定校。

◎設立 1900（明治33）年

◎形態 全日制・定時制／普通科／共学

◎生徒数 全入学定員約360人

◎2017年度入試合格実績（現浪計） 国公立大は、東北大、東京大、東京外国語大、東京藝術大、信州大、大阪大などに192人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大などに延べ558人が合格。

◎URL <http://www.nagano-c.ed.jp/ueda-hs/>

事例 3

京都府・私立 京都産業大学附属 中学校・高校



◎教育目標は「豊かな教養と、全人類の平和と幸福のために寄与する精神を持った人間の育成」。特進コース、進学コース（文理・KSU）を設置。国語教育、英語教育など、6つの重点教育を設け、次代を切り拓く力の育成を図っている。

◎設立 2007（平成19）年

◎形態 全日制／普通科／共学

◎生徒数 1学年約380人

◎2017年度入試合格実績（現役のみ） 国公立大は、京都市立大などに52人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、京都産業大、同志社大、立命館大などに延べ631人が合格。

◎URL <http://www.jsh.kyoto-su.ac.jp/>

事例 1

茨城県立下妻第一高校

各分野・単元で育成する資質・能力を明確にした 教育課程表を作成し、全校で授業改善に臨む

茨城県立下妻第一高校は、2017年7月、「高大接続改革対策ワーキンググループ」を発足。18年度の1年生が履修する各教科・科目の各分野・単元で育成する資質・能力を明確にし、それを基に授業改善を進めている。

2018年度に向けた全体方針

ワーキンググループを結成し 教育課程表を作成

茨城県立下妻第一高校では、2017年7月に文部科学省が「高大接続改革の実施方針等の策定について」を公表したことを受け、同月、校長、教頭、教務主任、進路指導主事、および国語、地理歴史・公民、数学、理科、英語の教科担当各1人から成る「高大接続改革対策ワーキンググループ」（以下、WG）を発足させた。

まず、メンバーが夏季休業中に文部科学省が公表した「大学入学共通テスト」の資料を読んで内容を把握。9月のWGで、18年度の新1年生に育成する資質・能力を全教科・科目で明確にするとともに、それらをもと

の分野・単元で育成していくのか、その関係性が分かる教育課程表を、1学年で履修する全教科・科目で作成することを決めた。「大学入学共通テスト」で求められる思考力・判断力・表現力などの資質・能力を教科指導の中でバランスよく育成するために、どの教科・科目においても各分野・単元でどのような資質・能力を生徒に身につけさせるのかを明確にする必要があると考えたからだ。教育課程表のフォーマットは、本誌17年8月号の特集で示した教育課程表のモデルを活用した。教務主任の涌井太郎先生はこう語る。

「本校が、各教科・科目において育成を目指す資質・能力の明確化と、それを育成するための教育課程表の作成から着手したのは、教科・科目

の学習内容を起点として考え、すぐ授業改善に移れるようにしたいという声が多かったからです」

18年1月、各教科・科目で作成した教育課程表（P.8図）の草案が職員会議に諮られ、承認が得られた。その後、教科・科目間で観点や表記をすり合わせて、新1年生用の「学習のしおり」に掲載することにした。

1 思考力・判断力・表現力等の育成への対応

4月の本格始動を前に、 資質・能力の育成を意識した授業改善に着手

作成した教育課程表を教科内で共有し、現在は、どのような活動をさせたり、発問をしたりすれば、思考力・判断力・表現力等の育成につな

がるのか、教師個々が指導を工夫している段階だ。進路指導主事で英語科担当の木村和広先生はこう語る。

「生徒の思考力・判断力・表現力

茨城県立下妻第一高校
木村和広 きむら・かずひろ
教職歴31年。同校に赴任して7年目。進路指導主事。英語科。

茨城県立下妻第一高校
涌井太郎 わくい・たろう
教職歴26年。同校に赴任して7年目。教務主任。数学科。

茨城県立下妻第一高校
吉田俊則 よしだ・としのり
教職歴13年。同校に赴任して6年目。2学年担任。地理歴史・公民科（日本史）。

茨城県立下妻第一高校
世木田和也 せきた・かずや
教職歴6年。同校に赴任して2年目。3学年担任。理科生

学校教育目標として学校全体で育成を目指す資質・能力は、各教科・科目で育成を目指す資質・能力から共通項を見いだし、まとめる予定だ。

*プロフィールは2018年3月時点のものです

図 「生物基礎」の教育課程表（抜粋）

分野・単元 育成を目指す資質・能力		【教科・科目】（理科・生物基礎）【甲】							
		1編 生物の特徴 ①生物の多様性と共通性 ②生命活動とエネルギー代謝		2編 遺伝子とそのはたらき ①生物と遺伝子 ②遺伝情報の分配 ③遺伝情報とタンパク質の合成			3編 生物の体 ①体内環境 ②体内環境を維持する仕組み ③免疫		
		①	②	①	②	③	①	②	③
科学的な思考力	科学的なものの見方ができる。それにより、科学に興味を持つことができ、深めることができるようになる。		○		○	○	○		○
表現力（書く）	授業や授業外で学んだことを適切に表現することができる。表現する際、適切な表現の仕方を選ぶことができるようになる。	○	○	○	○	○	○	○	○
表現力（話す）		○	○	○	○	○	○	○	○
表現力（図示する）		○	○	○	○	○	○	○	○
読解力（文章）	文章や図表から正しい情報を読み解くことができる。書いてあることを理解することは、生きるうえで大事な力である。		○		○	○			
読解力（図表）					○				
調べる力	留うだけでなく、自ら正しい情報を調べ、習得することができる。	○	○	○	○	○			○
実験技能	実験を適切に行うことができる。	○	○						○
考察力	実験結果や、文章で読んだものから得た情報を正しく理解し、現象を論理的に考えることができる。	○	○						○
観察力	現象や自然を観察し、共通点や相違点を見つけることができるようになる。	○							○

◎特に伸ばしてほしい資質・能力 ○伸ばしてほしい資質・能力

*学校資料をそのまま掲載

等を育成するための取り組みを、互見授業や教科会などで実践してもらい、優れた取り組みを学校全体で共有するようにしています」

各教師は、具体的にどのような授業改善を進めているのか。日本史担当の吉田俊則先生は、4～5時間に1回程度の頻度で、授業の最後に生

徒が記述する時間を設けている。書くことに対する生徒のハードルを低くするため、学習内容を数十字で要約させるところから始め、慣れてきたら、その授業で学習した歴史的対象の背景について考え、記述させる。そのように段階を踏み、記述力とともに思考力を必要とする課題を提示

するようにしている。

また、例えば、室町時代の製塩技術について学習した後に「この製塩技術は、その後どのように発展したと思う？」と生徒に問いかけ、個人やペアで考えさせ、発表させる活動も取り入れている。

「授業中にどのような発問をすれば、生徒の思考力や判断力を高めることにつながるのか、教材研究の段階から考え、準備した上で授業に臨んでいます」（吉田先生）

生物担当の世木田和也先生も、授業中に生徒に「なぜ？」と問いかけ、考えさせることを重視している。

「新出事項を学ぶ際には、『サボテンの葉がトゲになっているのはなぜだと思う？』といったように、生徒に『なぜ？』と問うようにしています。それを繰り返すうちに、生徒は

生物が生存していくための条件や環境の共通点をつかめるようになります。問いが、自分なりに仮説を立てて、思考するための足がかりとなっているのです」（世木田先生）

課題は、考えた内容を文章にして書く時間の確保だ。そこで、2年次では基本的に、考えさせた後は口頭での発表にとどめ、3年次で記述に力を入れるといったように、2年計画で記述力を高めようとしている。

以上のような教師個々の実践を、今後は各教科の指導計画や授業改善に生かしたいと、WGでは考えている。また、同校では、16年度に定期考査の問題を見直し、全教科で記述式問題を出題する方向とした。すると、授業でも記述力の育成を意識するようになり、授業改善につながる効果も見られているという。

2

英語4技能の育成と評価への対応

技能別のCAN-DOリストを作成し、4技能を意識した指導に転換

英語科では教育課程表の作成時に、4技能別のCAN-DOリストを作成し、3年間の各時期での到達

目標を明確にした。

「本校の生徒の多くが、筑波大学を第1志望にしています。志望実

現に必要な英語力をつけさせるために、最終到達目標をCEFR（＊）のB1に設定しました」（木村先生）

授業改善の方針としては、リーディングについては、授業や長期休業中の課題に副読本を用いた多読を取り入れ、リスニングについては、現在も授業冒頭に5分間設けているリスニングの時間を継続する。

ライティングとスピーキングについては、1年次の秋に2泊3日で行う「イングリッシュ・セミナー」を有効に活用する予定だ。同セミナーでは、イギリス人講師によるオール・イングリッシュの授業において、生徒は学校紹介などのスピーチを行う。そこで、1年次の前半は、同セミナーに向けたスピーチの原稿執筆や発表の準備をする中で、ライティングやスピーキングの力を高めたいと考えている。

そのようにして育んだ4技能の力を測る機会となるのが、17年度から受検しているベネッセの「GTEC」だ。1年次12月と2年次12月は各学年の生徒全員が、3年次6月は希望者が対象となる。1・2年次では同一の試験を悉皆受検とすることで、英語力の伸びを測れるようにした。

生徒は自分の4技能の力を把握して自学に生かし、教師は結果帳票から生徒の4技能の習得状況や課題を把握して授業改善に生かしている。そこで、CANIDORリストにおける各時期の到達目標は、GTECのスコアを目安に設定した。

『イングリッシュ・セミナー』などで4技能への意識を高め、学習を積んでからGTECを受検することで、生徒に学習の手応えを感じても

3

多面的評価への対応

生徒同士で刺激し合いやすい eポートフォリオの導入を検討

多面的評価への対応については、全校でポートフォリオの活用を進めようと、17年12月のWGでポートフォリオについての勉強会を実施し、18年1月下旬には全教師参加の研修会を開いた。

同校では、14年度から「世界に輝け 為（い）まの学園 光プロジェクト」を行っている。同プロジェクトでは、「国際的な視野に立つて行動できる人材」「地域社会に貢献できる人材」の育成を目指し、進路探究や地域探

らえればと思っています。また、生徒向けのルーブリックを作成し、生徒が自分で英語4技能の到達目標や到達度を把握できるようにし、自学自習を促したいと考えています」（木村先生）

少なくとも国立大学では「大学入学共通テスト」の枠組みで民間の英語の資格・検定試験が課されることとなり、1年次から4技能の試験に慣れることも受検の意義の1つとなった。

究など6つの柱で課外活動を行って

いる。アメリカでの研修、有名企業や研究所などへの職場訪問、小・中学校への学習支援活動など、生徒が個々に体験する多様な活動とそれぞれの振り返りを中心に、定期考査や模擬試験、学校行事の振り返りなども含め、ポートフォリオにまとめていこうとしている。

「生徒一人ひとりが自己肯定感を高められるポートフォリオを構築できるよう、プロジェクトの質自体を

高めようとしています。以前は、事後学習として単に感想を書かせるだけの活動もありましたが、今後は、生徒自身に活動の成果を発表させたり、生徒同士の相互評価の機会を設けたりしたいと考えています」（浦井先生）

生徒が学習や活動を振り返り、自己の変容や成長を自覚しやすくなるよう、同校ではeポートフォリオの導入を検討中だ。いつでも容易に自分の活動履歴を確認できるとともに、生徒間で情報共有をしやすくなり、ほかの生徒の活動から気づきを得る機会が増えるといった期待がある。

ポートフォリオは、個別大学入試で提出が求められる調査書や生徒自身が記入する活動報告書を作成する際の資料として、その必要性が高まっているが、浦井先生は次のように考えていると言う。

「小さな活動でもポートフォリオに蓄積しておけば、生徒がそれを基に自らのあり方を振り返り、考え、気づき、成長するチャンスが増えるでしょう。大学入試への対応のためだけではなく、生徒の成長を後押しするツールの1つとしてポートフォリオを活用したいと考えています」

＊ヨーロッパ言語共通参照枠（Common European Framework of Reference for Languages）の略称。語学シラバスやカリキュラムの手引きの作成、学習指導教材の編集、外国語運用能力の評価のために、透明性が高く、包括的な基盤を提供するものとして、2001年に欧州評議会が発表。A（基礎段階の言語使用者）、B（自立した言語使用者）、C（熟達した言語使用者）ごとに2レベル、計6レベルが設定されている。

事例 2

長野県上田高校

自校の教育のあり方を明確にした上で 教育活動を見直し、学校改革に取り組む

長野県上田高校は、文部科学省「スーパーグローバルハイスクール」の指定を追い風に、学校として目指すものを明確にし、教育活動全体を見直した。その方向性が高大接続改革に合致していると確信したことで、教師は自信を持って新たな大学入試を見据えた学校改革に取り組んでいる。

2018年度に向けた全体方針

自校が進むべき先を見据え、 教育活動全体を再構築

長野県上田高校は、地域の進学拠点校として最難関大学進学者を安定して送り出してきた。その同校が社会の変化を踏まえた学校改革に取り組み始めて間もない2015年度、文部科学省「スーパーグローバルハイスクール」(以下、SGH)に指定された。内堀繁利校長は次のように説明する。

「これからの時代を見据え、改革を進めようとしていた時に、SGHの指定を受けました。そこで、SGHを含めた教育活動全体の再構築を目指し、『本校の使命とは』『どの方向に進むべきか』『地域で果たすべ

き役割は何か』などの観点から、教師全員で議論しました」

15年度に教務主任が中心になって行っていた議論を活性化させるため、16年度から各分掌・学年の代表や管理職から成る「ビジョン委員会」で検討。職員会議後、1年間で15回ほど、授業改善や進路指導など毎回異なるテーマで話し合い、その結果を次の職員会議で投げかけて教師全員で議論するということを繰り返し続けた。廣田昌彦教頭はこう振り返る。

「初めのうちは個別の教育活動の話が中心でしたが、次第に学校として進むべき方向性が見え、その中で各教育活動をどのように機能させるかという議論に発展しました」

そうした議論が徐々にまとまる頃を見計らって、内堀校長が論点を整

理し、「本物の学力」「感性」「想い・志」「文武両道・自学自習と気概」の4つを教育活動全体で育むという方向を示す「上田高校の教育が目指すもの」にまとめた(図)。

その教育目標・方針が浸透するにつれ、各分掌・学年から新たな提案が次々と上がるようになった。また、この図を学校のホームページに掲載するとともに、PTA総会や学校評議員会、中学生の体験入学などでも発信し、外部から意見を求め、常に見直しを行っている。

組織的な学校改革が円滑に推進されている要因として、その方向性が高大接続改革の目指すところとほぼ合致している点も大きいという。

「本校の先生方は、生徒が大学や社会で活躍するために、高校でどう



長野県上田高校
山田翔輝 やまだ・しゅうき
教職歴5年。同校に赴任して6年目。学習指導係長。理科。



長野県上田高校
竹内光礼 たけうち・みつり
教職歴32年。同校に赴任して7年目。2学年主任。英語科。



長野県上田高校
福井克実 ふくい・かつみ
教職歴35年。同校に赴任して6年目。スーパーグローバルハイスクールチームリーダー。



長野県上田高校
菊池文明 きくち・ふみあき
教職歴30年。同校に赴任して7年目。進路指導主事。



長野県上田高校教頭
廣田昌彦 ひろた・まさひこ
教職歴31年。同校に赴任して2年目。



長野県上田高校校長
内堀繁利 うちほりしげとし
教職歴38年。同校に赴任して3年目。

いった資質・能力を育てるべきかを最も重視しています。その方向性が高大接続改革と共通するため、『本来目指すべき教育を通して、生徒の希望進路も実現させられる』と捉え、自信を持って取り組んでいます(内堀校長)

*プロフィールは2018年3月時点のものです

難関国公立大学志望者が多い同校では、以前から思考力・判断力・表現力等の育成に努めてきた。ここ数年はアクティブ・ラーニング（以下、AL）やICTを導入した授業を推進。17年度からは、前・後期に各1週間行っていた互見授業週間を全教科の研究授業週間とし、互見授業は通年の実施とした。

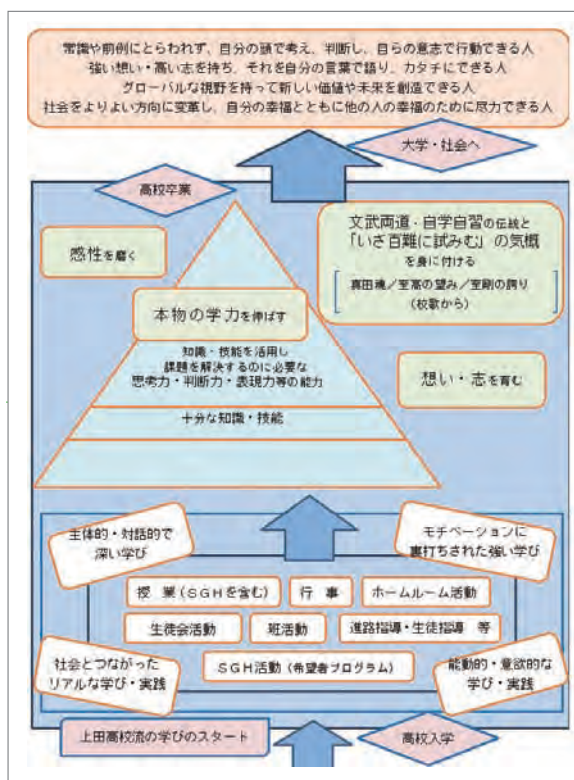
改善を促進している。例えば、理科担当で学習指導係長の山田翔輝先生は、英語の授業で生徒が起立してペアで音読し、終わった順に座るという活動を見て、自身の授業に、個々の考察後にペアで説明し合う活動を取り入れた。

「生徒が考えをアウトプットすることで、思考力や表現力の育成につながる」とともに、それらの力の程度

全教科・科目が同じ方向性で アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善を推進

1 思考力・判断力・表現力等の育成への対応

図 「上田高校の教育が目指すもの」(ver.2)



*学校資料をそのまま掲載

や理解度が可視化され、評価しやすくなりました」（山田先生）

見学者は授業後、シートにコメントを記入し、授業者に手渡しして意見交換をする。今後は、授業者・見学者の双方が互見授業をより効果的に授業改善に生かせるよう、見学時の観点を絞るなどの工夫をする考えだ。

定期考査のあり方も、記述力のさらなる育成を念頭に見直し、17年度から全教科で1問は論述問題を必出とした。出題の半数を論述形式とする

教科もあり、多くの生徒が記述に抵抗感がない。山田先生は以前から定期考査で論述問題の比率を高くしてきたが、卒業生から「先生の授業やテストで書くことには慣れていたので、大学のレポート作成が楽に感じた」と言われたことが自信になっているという。また、定期考査の問題は校内LANで共有し、授業と同様、同じ方向性で改革を進めている。

思考力・判断力・表現力等の育成においては、SGHの活動の効果も大きい。同校は、公立普通高校型SGHのモデルとして、課題研究を中心とした生徒全員参加型カリキュラムを行っている。生徒は各自の関心や希望進路を踏まえて12のカテゴリ

リーの中から1つを選んで課題を設定し、大学などからの指導を受けながら研究。2年次の終わりに研究成果を発表する。2年生全員が参加する台湾研修では、調査実習や現地の高校で発表を行うほか、選抜制で、フィリピン（1年次）とアメリカ・ボストン（2年次）での研修を実施する。それらの海外研修を機に大きく伸びる生徒が少なくないと、SGHチームリーダーの福井克実先生は語る。

「帰国後、多くの生徒が校外での活動に積極的になります。例えば、フィリピンで貧困問題に取り組むNPOの活動に参加した生徒は、帰国後、フィリピンの現状を広めようと情報を発信するとともに、募金活動を始めました。さらに、問題解決には知識が必要だと、授業でも意欲的に学ぶようになり、大学での目標も明確になりました。そうした主体的な活動が、思考力や表現力の向上につながっていると感じます」

17年度には1・2年生全員がベネッセの「GPS-Academic」(*1)を受検し、SGHの活動との関連を分析。その結果、特にフィリピンやボストンの研修の参加者は、協働的思考力が高まったことが分かった。

*1 ベネッセの教材の1つ。問題発見・解決に必要な3つの思考力（批判的思考力、協働的思考力、創造的思考力）を選択式、記述・論述式、質問紙で多面的に測るテスト。

「協働学習や研究発表など、課題研究で効果的だった学びの要素は、

教科指導に積極的に取り入れ、授業改善に生かしています」(廣田教頭)

2

英語4技能の育成と評価への対応

英語4技能を総合的に伸ばすよう活動を工夫し、その成果を民間の資格・検定試験で継続的に測定

英語の授業では、リスニング・リーディング・ライティングの3技能とともに、スピーキングの育成も強化しようと、4技能を統合した活動を取り入れている。例えば、全体で音読後、その要点を英語で説明し合うペアワークをして、個々にその内容を英文で書く。その英文をグループで回し読みし、感想を英語で伝え合うといった活動だ。活動をテンポよく展開し、英語4技能とともに思考力などの育成にも結びつけたいと考えている。さらに、オンラインの英会話レッスンにも注目していると、英語科の竹内光礼先生は言う。

「17年度、試験的にベネッセの『Online Speaking Training』(*2)を導入したところ、多くの生徒が講師と積極的に話し、『もっと続けたい』といった声が上がりました。英語が不得意な生徒も講師にリードさ

れ、前向きに学ぶ姿が印象的でした」

1・2年生全員が3技能を受検してきたベネッセの「GTEC」は、18年度はスピーキングを加えた4技能を受検する予定だ。

「GTECは実践的な英語力を測れる上に、WPM(*3)が算出されることも指導に役立っています。生徒には、『センター試験に対応するにはWPM120語が目標』と伝えています。『大学入学共通テスト』になると、さらにスピードが求められると考えています」(竹内先生)

英語力を継続的に測るツールとしてだけでなく、受検自体を学習機会の1つとしてGTECを活用している同校だが、17年度の1・2年生では、16年度の同学年よりもグレード5(*4)以上の上位層が大幅に増加、グレード3以下の下位層は減少と、活動中心の授業の成果が見られた。

3

多面的評価への対応

ポートフォリオの充実を図るとともに、進路指導のあり方も見直す

これまでは、主にSGHにおける活動について、年3回、アンケート形式で学習過程を振り返る自己評価や、2年次の学年末に課題研究を通して学んだことや今後のビジョンをまとめた「学びの報告書」などを、ポートフォリオとして蓄積してきた。

「SGHの活動で得た多様な経験を振り返り、自分はどういう成長を遂げたのかを考えて、他者に伝えるようにまとめる指導に力を入れてきました」(福井先生)

そのような過程を通して、生徒は自身の成長を自覚していくと、廣田教頭は言う。

「1年次の自分と比べて、どの経験を通して、自分の何が成長したのかを認識させることが、次の学びにつながるしていきます。そうした自覚を十分に得ることが、結果的に大学入試などで自分自身を語る力にもつながります」

現在、SGHにおける多面的評価

を他教科に広げていく手法を模索している。また、ポートフォリオを充実させることで、進路指導のあり方も捉え直す必要があると、進路指導主事の菊池文明先生は語る。

「ポートフォリオで学びの履歴を蓄積するとともに、教育活動全体で表現力を育むことで、生徒がアピールできることは広がります。大学入試がますます多様化する中で、AO・推薦入試も視野に入れ、これまで以上に個々の希望や適性に応じた進路指導を展開しようと考えています」

そうした改革の方向性を変えることなく、新たな大学入試を受験することになる新1年生を迎え入れる。

「単発的な取り組みを性急に取入れるのではなく、本来目指すべき教育のビジョンを十分に議論し、それぞれの先生が何をすべきかを考えて対応する。それが回り道のように見えて、結局は一番の近道なのだろうと思います」(内堀校長)

*2 ベネッセが提供するサービスの1つ。Skypeを活用したオンラインでのマンツーマンのプログラムで、主に中学・高校生を対象に、学習指導要領に沿って開発された教材でレッスンをを行う。CEFR(ヨーロッパ言語共通参照枠)に基づき、レベルに応じて約120のコンテンツを用意。*3 words per minuteの略。1分間で読むことができる語数のこと。*4 グレードは1~7まであり、グレード5は高校卒業時の目安となる。

事例 3

京都府・私立京都産業大学附属中学校・高校

教育の不易と流行の観点から、組織的に授業改善に取り組む仕組みを構築

京都産業大学附属中学校・高校は、高大接続改革の進展を機に、教育の不易と流行の観点から、自校の生徒に育みたい資質・能力を再確認。当初は、各教科が各コースの視点で個別に授業改善を進めていたが、徐々に組織的に取り組む仕組みを構築し、コース横断による学校全体での高大接続改革への対応にまい進している。

2018年度に向けた全体方針

教育の不易と流行を踏まえ主体的・協働的な学びを充実

2017年度に創立10周年を迎えた中高一貫校の京都産業大学附属中学校・高校では、大学進学実績を年々高める一方、教育活動における不易と流行を踏まえた学校改革に取り組んでいる。福家崇明校長はこう語る。

「時代が変化しても、本校の校訓である『知性・品格・気概』を育むという本質は変わりません。それを土台として、社会や教育環境の変化に応じて、これからの時代に求められる資質・能力を育むための主体的・協働的な学びを、いかにして充実させていくのかを議論してきました」その議論が活発化した契機は、電

子黒板や無線LAN環境などICT機器の導入だった。17年9月、教育活動でのICT活用を目指し、国語、地理歴史・公民、数学、理科、英語、情報科の教師と管理職をメンバーとする「ICT推進委員会」を設置し、教科を超えた情報共有を図った。山田亘副校長はこう説明する。

「委員会設置の当初のねらいは、ICT機器の活用方法の共有でしたが、次第に授業の本質的な議論に発展していききました。その中で、学力の3要素のうち、主体性や協働性の育成に力を入れる必要があるという共通認識に至りました」

主体性や協働性を育む授業づくりを検討する際には、同校がそれまで力を入れてきたキャリア教育を参考にしている。とりわけ、京都産業

大学への内部進学を目指す「KSUコース」では、開校当初からキャリア教育を充実させ、生徒が主体となって取り組む活動を展開している。その柱の1つが、情報科の授業と連携したプログラムだ。情報科主任の森本岳先生はこう説明する。

「情報科は大学入試で課される教科ではないため、生徒が高い学習意欲を持つかどうかは、物事の本質を突き詰めて考え、それを他者に伝えるという、主体的な学びの過程そのものを楽しめるかに懸かっています。そこで、問題解決型学習やアクティブ・ラーニング（以下、AL）の視点を取り入れながら、主体性や協働性を発揮して学ぶプログラムをつくってきました」

プログラムでは、生徒に育成した

い資質・能力を「情報活用能力」「主体的に適応する能力」「チャレンジ精神と発想力」とし、それらの育成に向けて、企業から提示された課題にチームで取り組み、調査や企画立案、プレゼンテーションなどを通じた探究活動を中心に展開している。そのようなキャリア教育や情報科で培ってきた学びの手法を、他教科にも応用しようと、各教科では精力的に授業改善に取り組んでいる。



京都産業大学附属中学校・高校
情報科主任
森本 岳 もりもと たかし
教職歴12年。同校に赴任して2年目。情報科主任。



京都産業大学附属中学校・高校
教職歴25年。同校に赴任して11年目。生徒部主任。地理歴史・公民科主任。2学年担任。



京都産業大学附属中学校・高校
教職歴28年。同校に赴任して11年目。英語科主任。



京都産業大学附属中学校・高校
副校長
山田 亘 やまだ ひろなる
教職歴30年。同校に赴任して11年目。



京都産業大学附属中学校・高校
校長
福家 崇明 ふけ たかあき
教職歴33年。同校に赴任して11年目。

*プロフィールは2018年3月時点のものです

「現在は取り組みの次の段階として、教科ごとの組織的な動きが活発になっていきます。これからの時代に求められる資質・能力、そして、そ

1 思考力・判断力・表現力等の育成への対応

教科ごとに深めた議論の内容を校内で共有して授業改革を推進

同校では、従来から思考力・判断力・表現力等の育成や、国立大学の個別学力検査への対応として、記述力の指導に力を入れてきた。自校の高校入試でも、思考のプロセスを記述させる問題を多く出している。

『大学入学共通テスト』では記述式問題も出題されるため、これまで以上に生徒に確かな記述力を育成する必要があります。そのため、これまでの指導を基に、授業改善を組織的に進めています」（山田副校長）

その先陣を切ったのは、地理歴史・公民科だ。17年度に「授業づくり研究会」を発足させ、授業改善を図ってきた。地理歴史・公民科主任の中尾健二先生は、その課題意識を次のように語る。

「生徒の学力の多層化が要因なの

の育成・評価を目的とした高大接続改革への対応を念頭に、学校を挙げて、教師、生徒の意識を変えていきたいと考えています」（山田副校長）

か、50分間、集中力が続かない生徒が増えていると感じています。そうした実態に加え、今後の教育改革の流れを踏まえて、A Lの視点やICT機器の導入により、教科の本質を捉えた学びの面白さを実感させる授業への転換を図っています」

同研究会では、まず、「アクティブ・ラーニング・パターン（教師編）（＊）の「アセスメント」を活用し、A Lに関する工夫をどの程度実践できているかを領域ごとにチェックし、授業の実態と課題を明らかにした。

「本校の教師は、教師としての哲学を持ち、自身が学び続けようとする意識や意欲が高い集団であるという好ましい結果が出ました。その一方、教師が生徒と同じ側に立つことや学習内容がつかっていく感動を

2017年度 高校1年(特進コース)「現代社会」冬季休業課題

2017年度 1年特進コース「現代社会」冬休み課題

1年 組 番 氏名: _____

提出日: 3学期の初回の授業時に。

【パフォーマンス課題内容】

お正月（2018年1月1日・3日・4日・5日）に発行された地方紙もしくは全国紙の新聞・新年特別号（※ただしスポーツ紙は除く）から、以下の条件に当てはまる記事を切り抜き（コピーでも可）、パフォーマンス課題を仕上げる。

切り抜く記事…「2018年はこういう年になる」という趣旨で、2018年年内に起こる政治・外交・経済動向や諸制度・諸規制、施行される法律、停止される制度、発効予定の条約などを紹介した記事やどれか一つ見つけて切り抜き、貼り付けなさい。

パフォーマンス課題…「あなたは高校公民「現代社会」教科書の執筆者です。あなたは250字程度のコラムの執筆を依頼されました。テーマは「2018年はこうなる」です。教科書の本文らしい文体で、重要用語は太字にして、本文を作成しなさい。

※新聞が家にない場合、近くのコンビニ・駅書店などで購入できます。旅行中ならば、旅行先の地方紙でもOKです。
※評価ポイント「教科書らしい明確な文章で」、「重要用語は太字にし」、「読者の疑問を解消するような文体」であること！

この枠内に収まるように、しっかりとリ付けて貼り付けること。
両端・上下はみ出る部分については折りたたんで下さい。
※縮小コピーの必要はありません。

■ 切り抜いた新聞: (新聞) 2018年1月 日 () 発行
■ コラム「2018年はこうなる」(250字程度)

*学校資料をそのまま掲載

味わわせるなどの項目が弱く、まさに、次期学習指導要領で求められている授業改善が必要であるという結論に至りました」（中尾先生）

そこで同研究会では、様々な勉強会や報告会を行い、授業改善を進めている。初回は「大学入学共通テスト」のプレテストの分析と、それに基づく授業づくりについて議論した。

「歴史については、これまでの指導で通用する部分もあるという指摘もありましたが、史料から歴史的事実やその背景を考察するような問題は、知識習得型の学習だけでは対応が難しく、教科の本質を理解してい

ないと太刀打ちできないと感じました」（中尾先生）

出題傾向等の分析結果を共有した上で、授業改善の方向性について、「授業の中に『問い』をつくること」「年度当初、もしくは学期初めに、生徒に授業計画（単元計画）を明確に示すこと」「生徒の失敗を許容すること」「活動の成果や結果をポートフォリオとして記録し、生徒同士の相互評価を行うこと」といった授業づくりのポイントを共有した。

すると、そのような授業づくりにICT機器の活用が有効ではないかという意見が上がり、50代のベテ

* 株式会社クリエイティブシフトと株式会社ベネッセコーポレーションが共同開発した教師用教材。アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた指導の工夫・コツを抽出し、パターン・ランゲージにより言語化しており、「アセスメント」「カード」「冊子」の3点で構成される。

ラン教師が、「ICT機器を使いたい、使い方が分からない」と発言した。そこで、2回目の研究会はICT機器を活用した授業づくりについてのアイデアを共有した。

3回目は、中尾先生が次期学習指導要領について解説し、若手教師がA.Lの視点を取り入れた授業の実践を報告。続く4回目は、新任の教師の授業を見学し、それを基に指導のよい点や改善点を指摘し合った。

研究会で様々な工夫を共有したことで、生徒に出す課題の内容も変化してきている。例えば、現代社会で

は、冬季休業中に、「2018年は

こういう年になる」という趣旨に該当する新聞記事を切り抜き、その内容をテーマにコラムを書くというパフォーマンス課題を出した(図)。

そうした授業改善の動きを全校に広めようと、18年3月に行う5回目は、他教科の教師にも参加を呼びかけ、これまで研究会で議論してきた授業づくりに関する知見を全校で共有する予定だ。

「今後、他教科との連携を強化し、学校全体で授業改善を加速させていきたいと考えています」(中尾先生)

2

英語4技能の育成と評価への対応

授業とオンラインの英会話レッスンを連携させた指導で、英語4技能をバランスよく育む

英語科では「4技能のインテグレーション」をキーワードとした授業づくりを進めている。英語科主任の松浦京子先生はこう語る。

「これまでも4技能統合型の指導を推進してきました。ただ、スピーキングに課題のある生徒が少なくないため、プレゼンテーションやスピーチ、グループワークなど、多様

な活動を一層充実させていきたいと考えています」

スピーキング強化の一環として、18年度の1学年からオンラインの英会話レッスンを導入する。17年度にオンラインの英会話レッスンを試行した際には、事前の授業で自己紹介をしたり、相手に質問したりする活動を繰り返し行ってから、講師と

の1対1の会話に臨ませた。

「事前の活動により、『自分について話したい』『相手について知りたい』といった気持ちが高まったため、実際のレッスンでも生徒は意欲的に話し、会話を楽しんでいました。授業とオンラインの英会話レッスンを連携させ、より効果的に指導していきたいと思います」(松浦先生)

3

多面的評価への対応

生徒の資質・能力を伸ばすため、eポートフォリオの導入を検討

進学コースでは、定期考査や模擬試験、各教科の成果物をファイルにとじるポートフォリオの作成を行ってきた。今後は、評価の対象を課外活動や個人的な活動などにまで広げ、多面的評価の充実を図っていく。そこで、新たな仕組みとして、18年度の早い段階で1学年へのeポートフォリオの導入を考えている。

「様式が変更される調査書に対応する目的もありますが、生徒の成長を促すためには、定期考査などの結果だけで評価するのではなく、生徒一人ひとりの活動に着目して背中を

また、進学コース(文理・KSU)の生徒のみだったベネッセの「GTEC」の受検対象を、18年度から特進コースの生徒にも広げる予定だ。

「英語の資格・検定試験は、自身の英語力を客観的に捉えるだけではなく、英語を多面的に捉えて学習し、4技能のバランスよい育成につながると考えています」(松浦先生)

押してあげたり、自分の成長過程が目に見えるような仕組みを整えたりすることが大切だと考えています。資質・能力を確実に伸ばしつつ、調査書などの対応にもつながるポートフォリオの仕組みを構築したいと思っています」(山田副校長)

一連の学校改革を推進する上での課題は、様々な取り組みの組織化だ。「教師や教科による個別の試みは着実に進んできています。管理職の役割として、それを学校としての取り組みにするための組織づくりに努めていきます」(山田副校長)

改革事例から導く！ 「学校教育デザイン」を描く^{しるべ}道標

社会の変化を受けて、教育環境が大きく変わろうとしている今、
各校にはこれからの時代を担う人材を育成するための教育のあり方が問われている。
「これからの学校」の視点に立ち、
改革を進める全国の高校の取り組みを紹介していく。

「学校教育デザイン」とは？

カリキュラム・マネジメントを通じて 実現される学校改革の営みのサイクル

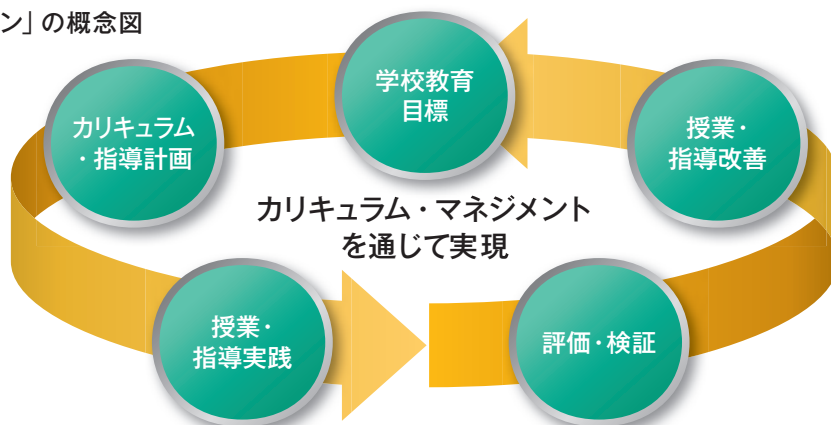
AI（人工知能）の発達などを背景に、予測困難な変化を遂げていく社会を生きる生徒が未来を切り拓いていけるよう、学校教育において育成を目指す資質・能力（コンピテンシー）の3つの柱が、次期学習指導要領において明確化された。それはすなわち、「生きて働く知識・技能」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等」「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等」だ。本誌では、各校が積み重ねてきた成果、伝統を土台にしなが、自ら未来を切り拓き、家庭や地域、社会の期待に沿える資質・能力を備えた人材を育てるための学校づくりの視点を「学校教育デザイン」と名づけ、2017年度、4号にわたり、先進校事例などを交えながら特集記事を展開してきた。

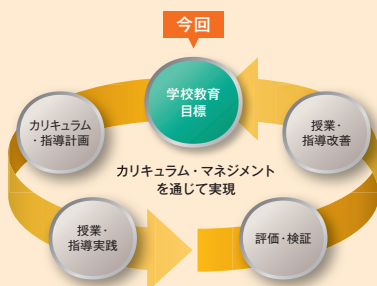
「学校教育デザイン」は、学校教育目標からカリキュラム・指導計画の策定、授業・指導実践、その評価・

検証、授業・指導改善までの一連のサイクルが、カリキュラム・マネジメントを通じて実現される学校改革の営みである。現在、全国の学校が社会環境、教育環境の変化に対応すべく、「学校教育デザイン」を描く取り組みを進めている。高校教育は、20年度に「大学入学共通テスト」の実施、22年度に次期学習指導要領の実施と、大きな変化が続く。そのため、「大学入学共通テスト」を受験する生徒が入学する18年4月から、どのような資質・能力を生徒に育み、どのような教育課程や指導計画を策定して、どのように授業や評価方法を改善するのかを学校全体で考えていくことがますます求められる。

常に生徒を見守りながら育て、新しい時代に向き合おうと奮闘する各校の取り組みを、本コーナーでは紹介していく。

「学校教育デザイン」の概念図





育成を目指す資質・能力を 「資質・能力の3つの柱」「綱領」の 観点で集約し、諸活動にプロットする

青森県立青森高校

育成を目指す資質・能力を 「青高力」として定義

青森県立青森高校は、2018年

1月、青森高校で身につける10の資質・能力を「青高力」として定義した。

これは、かねてより掲げる「目指す生徒像（グランドデザイン）」の実現に向けて、学校の諸活動をよりよいものにしていくための一歩であると成田昌造校長は説明する。

「14年度よりスーパーグローバルハイスクール（以下、SGH）、17年度からはスーパーサイエンスハイスクール（以下、SSH）の指定校となり、一層多様化した教育活動に1つの方向性の下で取り組むため、育成を目指す資質・能力を明確化する

の必要がありました」（成田校長）

資質・能力の定義は、全教師による議論を通じて進められた（図1）。

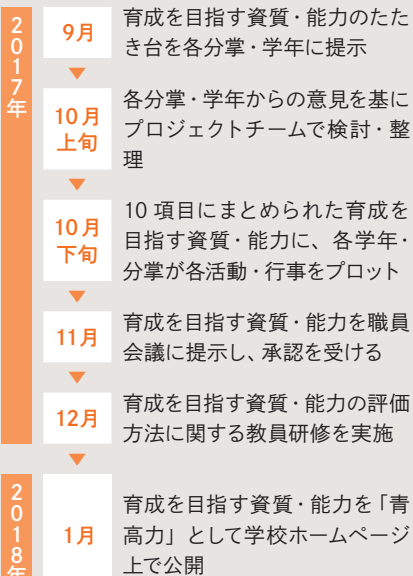
まず、大瀬幸治教頭がたたき台として、育成を目指す11の資質・能力を提示した。

「生徒の気質や志望進路を踏まえて、具体的な言葉で表現し、各分掌・学年に提示しました」（大瀬教頭）

各分掌・学年からの意見を反映させて、大瀬教頭はさらにたたき台を練り上げた。そして、成田校長直下で組織された若手、ミドルリーダー中心の「プロジェクトチーム」へとさらなる検討を引き継いだ。

プロジェクトチームは、「10年、20年後も解釈がぶれない資質・能力の定義」を目指し、「資質・能力の

「青森高校で身につける資質・能力」 策定の流れ



*学校資料を基に編集部で作成

3つの柱」と「綱領」の2つの観点で検討を進めた（P.18図2上）。プロジェクトチームの笠井敦司先生



青森県立青森高校校長
成田昌造 なりた・しやうぞう
教職歴36年。同校に赴任して3年目。



青森県立青森高校教頭
大瀬幸治 おおせ・ゆきはる
教職歴31年。同校に赴任して1年目。



青森県立青森高校
当麻進仁 たいま・のぶひと
教職歴28年。同校に赴任して3年目。探究学習部主任。英語科。



青森県立青森高校
笠井敦司 かさい・あつし
教職歴21年。同校に赴任して6年目。進路指導主事。国語科。

青森県立青森高校

◎青森県第三中学校を前身とする旧青森県立青森高校と、青森県立第三高等女学校を前身とする旧青森県立青森女子高校が統合して生まれた。県内で最も古い歴史を持つ高校の1つ。綱領として自律自啓「誠実勤勉」「和協責任」の3つを掲げる。

◎設立 1900（明治33）年

◎形態 全日制／普通科／共学

◎生徒数 1学年約280人

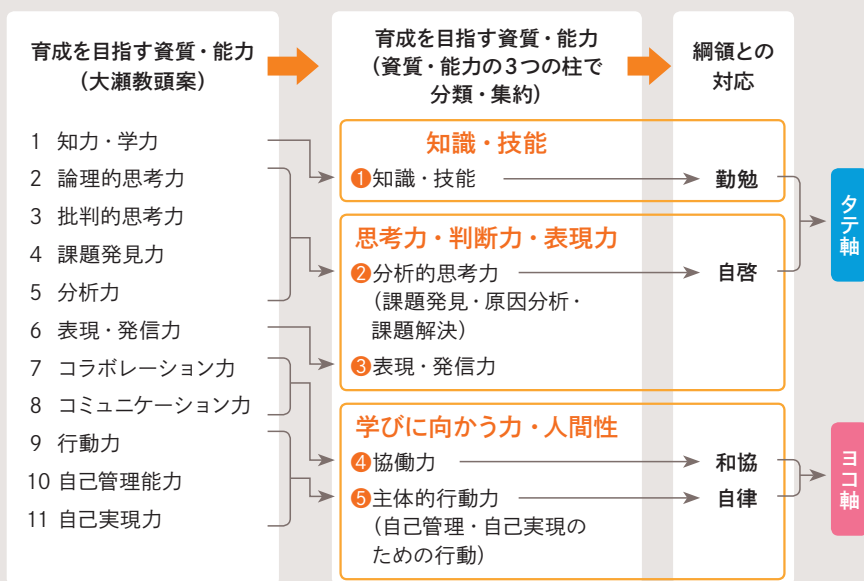
◎2017年度入試合格実績（現役のみ） 国公立大は、北海道大、弘前大、東北大、東京大、一橋大、大阪大などに156人が合格。私立大は、慶應義塾大、東京理科大、明治大、早稲田大などに延べ163人が合格。

◎URL <http://www.aomori-hs.ed.jp/>

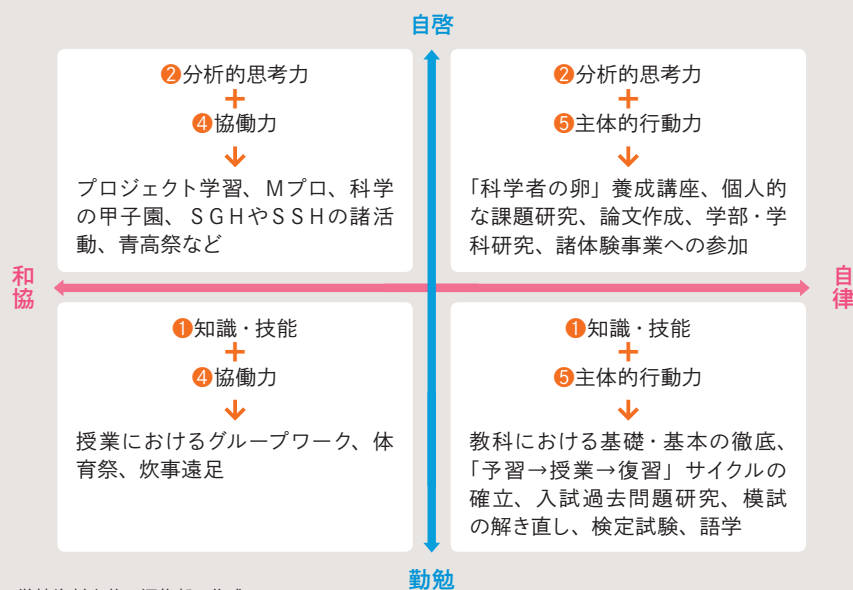
図2

育成を目指す資質・能力の分類・集約とマトリックスの作成

■育成を目指す資質・能力の分類・集約



■活動・行事をプロットし、青森高校を俯瞰する



*学校資料を基に編集部で作成

は、その経緯を次のように説明する。
「本校の綱領は、『自律自啓』『誠実勤勉』『和協責任』の3つです。綱領をじっくりと見ているうちに、『自啓』『和協』など、本校の卒業生が愛する精神は、SGHやSSHの活動で求められる資質・能力と共通していることに気がつきました。本

校において不変の綱領と、変化する社会で求められる『資質・能力の3つの柱』の2つの観点で検討すれば、本校で育成を目指す資質・能力が、生徒、教師にとってより深く理解・納得できるものになるのではないかと考えました」(笠井先生)

さらに、プロジェクトチームでは、

SGHやSSHの指定によって多様化した活動・行事を体系的に理解するために、各活動・行事がどの資質・能力を育成するのかを俯瞰する4象限マップを作成した(図2下)。これは、各活動・行事をいずれの象限に置くかによってどの資質・能力を育むかが変わるだけでなく、そ

評価方法を確立させ教科指導を含めた改善へ

プロジェクトチームでの検討を経て、育成を目指す資質・能力は10の力で整理され、「青高力」と名づけられた(図3)。さらに、各分掌によって、現在行われている活動・行事がそれぞれの資質・能力の育成を指しているのかを◎、○で明示した表を作成した(図4)。

各活動・行事で育成を目指す資質・能力が明らかになったことで、教師は指導のメリハリがつけやすくな

の活動・行事でどのような指導を行うのかも変化してくる。ややもすると「こなすこと」が目的化しがちな各活動・行事に対して、「どの資質・能力を育むためのなのか」を常に意識して向き合うためのマップだ。

「各担当が各活動・行事の実施要項を作成する際には、マップを参考に、育成を目指す資質・能力を具体的に挙げていきます。担当によって育成を目指す資質・能力が異なることもあるでしょうが、一人ひとりの教師の個性を生かし、活動・行事の形骸化を防ぐという意味でも、よいことだと思っています」(笠井先生)

る。指導改善の一步を踏み出した同校が今、取り組んでいるのが、評価方法の研究だ。中心となっているのは、同校の探究学習を牽引する、探究学習部主任の當麻進仁先生だ。

「本校では、全学年混合のプロジェクト学習を展開していますが、その活動で育成を目指す資質・能力をCAN-DOリストで整理し、生徒の自己評価に活用してきました。コンピテンシーベースの活動では、CAN-DOリストがあることで、生徒も教師も資質・能力を意識して取り組むことができます。プロジェクト学習で培ってきた評価方法を、新

しく定義された青高力とすり合わせて、新たな評価軸を作成し、学校の諸活動での評価に生かしていくように準備を進めています」（當麻先生）

既に同校では、資質・能力の評価方法に関する校内研修を実施。プロジェクト学習の最終レポートを材料に、青高力の一つひとつの資質・能力について、到達度を示す評価基準の尺度に基づき、実際に教師たちがレポートの評価に取り組んだ。

「資質・能力をどのように評価するのかを明確にし、生徒にも共有していくことで、生徒は自覚的に学びに向かうことができます。また、教

図3

目指す生徒像と育成を目指す資質・能力（青高力）

目指す生徒像

主体性と協調性をもって果敢に未来を切り拓く生徒

- ・自己管理の態度と心身の健康に努める生徒
- ・多様性を尊重し社会規範を遵守する生徒
- ・主体的に課題を発見し、最適解を探究する生徒

育成を目指す資質・能力（青高力）

知力・学力	各教科の内容を理解し、それを活用する力
課題発見力	複数の統計や資料から、改善・克服すべき課題を設定する力
論理的思考力	客観的データや先行研究を踏まえ、自らの理論を筋道立てて構築する力
課題解決力	解決のための仮説を立て、それを実証するために行動する力
原因分析力	課題の背景や要因を、複数のデータに基づいて多角的な視点で捉える力
受信力・発信力	人の話を傾聴し様々な情報を受け取る力、自分の考えを分かりやすく相手に伝える力
協働力	他者の価値観を尊重しつつ他者と協力し、1つのものを成し遂げる力
行動力	自分の掲げる目的を達するために、主体的かつ計画的に実行する力
自己管理能力	基本的生活習慣を確立し、健康と安全を意識して行動する力
自己実現力	社会の中で生きる自分を想像し、多くの情報を活用して実現させようとする力

*学校資料を基に編集部で作成

図4

各活動・行事で育成を目指す資質・能力

- ：育成したい力
◎：最も育成したい力

活動・行事名	実施月・学年	1 知力・学力	2 課題発見力	3 論理的思考力	4 課題解決力	5 原因分析力	6 受信力・発信力	7 協働力	8 行動力	9 自己管理能力	10 自己実現力
体育祭	6月・全							◎	◎	○	
職業ガイダンス	6月・1年		○				○				◎
大学ドリーム講座	6月・2年		○				○				◎
青高祭	7月・全			○			◎	◎	◎		
遠足	9月・全							◎	○	○	
芸術教室	10月・全	○					◎				
修学旅行	12月・2年	○		○				◎	○	◎	
定期考査	通年・全	◎		○	○	○				○	
実力テスト・校内模試	通年・全	◎		◎	○	○				○	
ゼミ活動	通年・全	○	◎	○	◎	◎		◎	○		○
講演会	通年・全		○				○				◎
Sプロジェクト	通年・全	◎		◎	○	○		○	○		◎
Mプロジェクト	通年・全	○	◎	○	◎	◎	○	◎	○		◎
部活動	通年・全						○	◎	○	◎	○

*学校資料を基に編集部で作成

導かれた道標

校訓、綱領など普遍的な理念も踏まえた学校教育目標は、生徒、教師の共感が得られるものとなる。

師の評価と自己評価とのギャップから、さらに深く、多角的に自分を見ることができず」（成田校長）

育成を目指す資質・能力を各教科でも評価するため、18年度のシラバスには、資質・能力の3つの柱と青高力での評価の観点・内容、評価方法が記載される。

「青高力を生徒に周知しながら、

各教科の授業改善に結びつけていくのが18年度のテーマです。新しい取り組みですから、今後も壁にぶつかる場面はあるでしょう。しかし、教師が悩んだ分、生徒は変化、成長していきます。これまで以上に、私たち教師にも学び続けることが求められていると思います」（成田校長）

●2年生「古典B」の授業で、『更級日記』の冒頭部分を題材とした全8時間の単元の7時間目。授業の前半は前時までに班ごとに作成した本文の紙芝居を発表し、後半は個人で作者の心情について理解を深めていった。(P.23に単元の指導計画を掲載)

前時から少し時間が空いたため、授業の冒頭、先生は「主人公は誰だった?」「門出の時、主人公は何をした?」といった質問をしながら、前時までに学習した内容を振り返った。その上で、「門出の時に泣いたのは、ただ悲しかったことだけが原因なのかな。今日はその点を深めて考えていきましょう」と、本時の目標を伝えた。

登場人物の言動や情景に
込められた心情を、
深く理解できる資質・能力を養う

米林先生のアクティブ・ラーニング

登場人物の言動に込められた心情を読み取り、豊かな感性を養ってほしい

米林舞子先生は、生徒が活動し、自ら考えるアクティブ・ラーニングの視点を取り入れた授業に初任時から取り組んできた。きっかけは、初任校での先輩教師の一言だった。「失敗が許されるのは3年目まで。それまでは何があっても全力でフォローするから、自分がよいと思うこ



石川県立松任高校

米林舞子 まっとう よねばやし・まいこ

教職歴10年。同校に赴任して2年目。

2学年担任。進路指導課。

教務課基礎学力定着推進担当。国語科担当。

初任時からアクティブ・ラーニングを実践している。

石川県立松任高校

◎校訓は「明き心に」「深き心に」「堅き心に」。
2016年度から文部科学省「高校生の基礎学力の定着に向けた学習改善のための調査研究事業」(指定期間3年)の指定を受け、ICTを活用した授業改善などを推進している。

◎設立 1963(昭和38)年

◎形態 全日制/普通科・総合学科/共学

◎生徒数 1学年約200人

◎2017年度進路実績(現役のみ)

国公立大は、富山大、富山県立大に2人が合格。
私立大は、専修大、金沢学院大、金沢工業大、北陸大、中京大などに延べ51人が合格。短大、専門学校進学67人。就職61人。

◎URL

<http://cms1.ishikawa-c.ed.jp/~mattfh/NC2/hdocs/>



各班の発表が終わる度に、生徒は「聞きやすさ」「分かりやすさ」などを評価シートに記入。先生は発表に対して、「場面設定が上手でした」「門出の意味をきちんと理解していたね」といった前向きなコメントをした。評価と並行して、授業後半の活動の準備として、先生が各班の発表で出てきたキーワードを取り上げ、教室の後ろの黒板に本文の構造図を描いた。

前時までに各班で作成した紙芝居を、1班約3分間ずつで発表。タブレットに取り込んでおいた紙芝居をプロジェクターで投影し、自分が作成を担当した場面を順番に発表した。分かりやすく伝わる台本や絵にするためには、主人公の心情を深く考えなければならず、『更級日記』に対する理解が深まったと、生徒は言う。

とは何でもやりなさい。初任校は地域からの期待が大きい進学校だったが、その言葉があったからこそ、実績を出すプレッシャーにも押し潰されずに、自分の授業スタイルを磨くことができたと言う。

今回の授業は、2年生普通科理系クラスの「古典B」で、全8時間の『更級日記』(菅原孝標女^{すがわらのたかすけのむすめ})の単元だ。この作品は、関東から上京した主人公が、父の死や結婚、官仕えなど自身の経験をつづった回想録で、授業で扱うのは、関東での生活から京への門出までを描いた冒頭部分である。1時間目は、本文を読み解くための知識を学んだ。「継母」の意味を知らない生徒もいるため、主人公の継母とはどのような存在なのか、『シンデレラ』との比較などを通して考えさせた。そして、2〜4時間目は、場面ごとの音読と現代語訳をしながら、「主人公はなぜ薬師仏を造ったのか」「なぜ早く京に上りたいと思ったのか」などの問いを設け、班で話し合わせた。

「現代語訳をさせるだけでは、生徒の集中力は続きません。生徒が関心を持ち続け、理解を深められるよう、1場面ごとに現代語訳のどこに答えが隠れているのかを問いました」

5・6時間目は、主人公の心情理解を深めるために、5つの班に分かれて、『更級日記』の紙芝居を作成した。本文を班の人数分の場面に分け、各自が担当する場面の絵を描き、小学生にも理解できる台本を考える。そして、7時間目の本時に、完成した紙芝居を発表。ほかの班の

発表も聞いた上で、門出における主人公の涙の理由について各自で考え、400字にまとめる。上京し、憧れの『源氏物語』に出合える期待と、愛着ある場所や信仰する薬師仏から離れなければならない悲しさが、主人公の心をかき乱していることに気づかせるのがねらいだ。解説は8時間目に行う。

「今の生徒は、よいことも悪いことも『やばい』の一言で済ませてしまいます。現代語訳が通り済んだこの段階では、それだけで答えが分かるような発問はせず、主人公の言動や情景描写から心の乱れや葛藤を読み取り、日本人らしい豊かな感性と語彙力を身につけてほしいと考えました」

思考の活性化・深化への配慮

生徒が自分事として 本文の内容を捉えられるよう工夫

米林先生は、目の前の生徒の気質や能力、教材に応じて活動に幅を持たせている。今回は、ビジュアルで物事を捉えることに慣れている生徒たちに合わせて紙芝居を用いることにした。

「今回の問いは、本文に直接的には表れていない主人公の心情に迫るものです。言葉だけの話し合いでは、生徒間で理解にずれが生じるかもしれないと思いました。そこで、絵を描いて本文の内容を再解釈させることで、生徒同士で考えを共有でき、より深い読み込みにつながると

各自、主人公の涙の理由を400字でワークシートにまとめる。先生は、生徒からの質問に対して全員に聞こえるように回答し、ヒントを与えた。生徒の記述からは、「都に行けるうれしさと故郷を離れる悲しさが入り乱れていた」など、主人公の心情をより深く理解している様子が見て取れた。時間内に書き切れなかった生徒は、放課後までに書き上げて提出した。

各班の発表も踏まえて、生徒個々で主人公の涙の意味を考える。まず、「涙の理由」について班ごとに話し合わせた後、後ろの黒板に描いた構造図を基に、先生が解説した。「主人公が住んでいた田舎はどんな場所だった?」「主人公が家を振り返った時、何が見えた?」などと問いかけながら、主人公が置かれた環境や、そこから分かる主人公の心情を整理していく。

考えました」

紙芝居の作成過程では、牛車を描くために古語辞典を調べるなど、より分かりやすい紙芝居とするために工夫する生徒の姿も見られた。

また、生徒が古文を身近に感じられる工夫もしている。今回は、主人公が故郷に寄せる複雑な思いを、生徒が卒業時に母校に感じるであろう思いと重ね合わせて解説した。

「窮屈であると同時に愛着のある場所でもある」という対比の構造は、1年後に卒業を控えた生徒たちが高校に感じる気持ちと重なる部分が多いと思います。生徒が共感できる視点や切り口をできるだけ盛り込むことで、自分事として古典文学の世界に向き合えるようにしました」

場づくりへの配慮

間違っても大丈夫という クラスの雰囲気をつくる

活動を活性化させるために、米林先生は、間違ってもよいという雰囲気づくりに努めている。まず、班のメンバーは活動ごとに生徒たち自身で決めさせるが、1班5〜7人として、仲のよい友人だけとしないようにしている。ほかに、2人だけメンバーを変える」「男女を同じ人数にする」などと指示を変えることで、メンバーが流動的になるよう工夫している。

「生徒たち自身に班づくりをさせて、社会性を養うとともに、クラスメートの知らない一面



生徒が作成した紙芝居の一場面。担当するのは一場面だが、前後の場面とのつながりも踏まえてその場면을的確に表すためには、本文全体を理解する必要がある。

を知り、信頼関係を育むことをねらいとしています。次第に、間違っても大丈夫、分からないことはメンバーに聞いてもよいといった意識が醸成されていきます」

年度当初こそ「別の子と一緒がよかった」などと言う生徒がいたものの、1学期が終わる頃には、誰と組んでもきちんと話し合いができる雰囲気になったと言う。

成果と課題

書くことで、自分の考えを整理し、 思考力を養ってほしい

成果の1つは、古典文学に興味を持つ生徒が増えていることだ。「この話の続きはどうなるんですか」と、米林先生に質問する生徒が1年次よりも増えたと言う。

「日本や中国の古典には、人生の岐路に立った

単元の指導計画

【教科・科目】国語・古典B 【分野・単元】古文・日記 【テーマ・作品】『更級日記』より門出 【設定時数】全8時間の中の7時間目
【単元目標】登場人物の心情や当時の様子を想像することで、古典の世界に親しむ態度を養う

時数	学習内容	身につけさせたい 資質・能力	授業の流れ	教師の配慮	評価方法
1	音読。「継母」とはどのような存在か。	・主人公と「継母」の関係を理解する【知識】	①『シンデレラ』を用いて、「継母」について理解し、主人公にとっての義理の母であることを確認する。②本文を音読し、登場人物を把握する。	【主体的な学び】登場人物の人間関係を理解させ、本文への関心を引き出す。【深い学び】『シンデレラ』におけるシンデレラと継母の関係と、『更級日記』における主人公と継母の関係を比較させ、本文読解の鍵である「物語」に着目させる。	
2	音読。主人公「孝標女」はなぜ「薬師仏」を造ったのか。	・主人公が「薬師仏」を造るに至った心情を読み取り、説明する【思考力・表現力】	①本文の現代語訳をすることで、設問の解答が導き出せることを自ら発見する。②班で協力して現代語訳や解答を作成する。③周辺人物の行動によって主人公の心情がどのように変化していったのかを捉えて、解答を作成する。		
3	音読。「京に疾く上げ給ひて」と思ったのはなぜか。	・本文から「京」と上総の国の違いを読み取り、主人公が上京したい理由を説明する【思考力・表現力】	①本文の現代語訳をすることで、設問の解答が導き出せることを自ら発見する。②班で協力して現代語訳や解答を作成。③本文の構造比較から「京」と上総の国の違いを読み取る。	【対話的な学び】班で協力して活動できているか。【深い学び】班で解決できない時に、助言をする。	
4	音読。「孝標女」はなぜ「うち泣」いたのか。	・主人公が「うち泣」いた理由を本文から読み取り、説明する【思考力・表現力】	①本文の現代語訳をすることで、設問の解答が導き出せることを自ら発見する。②班で協力して現代語訳や解答を作成する。③班で相談し、字数制限に合わせて解答を作成する。		
5	アウトプット。紙芝居の作成①	・本文の内容を紙芝居にするためにコマ割りをする【協働性】 ・現代語訳を小学生にも理解できる言葉に変換する【協働性】	①班の人数で本文のコマ割りをする。②絵の統一を図り、その後、各自で担当の箇所の絵と紙芝居原稿を考える。	【対話的な学び】班で意見交換しながら、活動を進めているか。【深い学び】各班を回り、相談に乗る。	
6	アウトプット。紙芝居の作成②	・本文の内容を紙芝居に起こす【協働性】 ・重要古語を分かりやすく台本に組み込む【協働性】	①紙芝居の台本を班内で読み合わせ、微調整を行う。②班ごとにリハーサルを行う。	【対話的な学び】班の中で各自の役割に責任を持って活動できているか。【深い学び】各班を回り、助言する。	・紙芝居の台本
7	紙芝居の発表と深化学習	・聞き手に伝わりやすい工夫をして発表する【表現力】 ・「門出」に際する主人公の複雑な心境を文構造から探る【技能】	〈班活動〉紙芝居の発表を行い、評価シートに記入する。 〈個の活動〉発展問題：「門出」の際の涙の原因は悲しかったことだけなのか。	【対話的な学び】聞く姿勢や発表の姿勢を指導する。【深い学び】紙芝居の発表を基に、本文の構造について板書し、「主人公にとっての家とはどのような場所であったのか」を問いかけ、本文に隠された心情を考えるきっかけを与える。	・他者評価シート ・自己評価シート
8	まとめ	・「門出」に際する主人公の複雑な心境を説明する【思考力・判断力・表現力】	発展問題の解答について、生徒の解答を全員で共有しながら、文構造を踏まえているか確認し、解答を書き直す。	【主体的な学び】【対話的な学び】論理的に解答を書けるよう、他者の解答を共有・検討する。【深い学び】本文に表れてこない登場人物の心情を、文構造の理解を根拠に導き出せることを伝える。	・ワークシート

*米林先生作成の単元の指導計画を基に編集部で作成

生徒の声



今村玲太さん 米林先生の授業は、自分で調べたり、友人と協力したりしながら課題に取り組み、理解が深まりやすいと感じています。特に今回は、本文に書かれている世界を想像しながら紙芝居を作ったので、本文の流れがすっかり頭に入り、主人公の心情もより深く理解できました。

漆原菜美さん 難しい課題も、班で話し合いながら取り組めるので、安心して授業に臨んでいます。また、同じテーマで話し合っている中、自分と違う意見が出てくる点も刺激的です。今日の発表では、ほかの班の紙芝居を見ることができ、自分たちとは違う視点や表現方法があることが分かり、もっと伝わりやすくするためにどうすればよいのかを考える機会になりました。

時に心の支えになる一節があります。生徒たちが大人になった時、高校時代に学んだことを思い出して古典を手にとったり、自分の子どもに語り聞かせたりすることができるようになっていてほしいと思っています」

一方、課題は書く力の向上だ。今回の課題では、指定字数いっぱい書いた生徒がいる一方、200字にも満たない生徒もいた。

「書くことで、自分の考えを整理することは、思考力を養う上で非常に有効な方法です。書くことに前向きになれるようにするためには、どのような活動が必要なのか、引き続き模索していきたいと思っています」

●1年生「数学Ⅱ」の「いろいろな式」における「高次方程式」の最終回。生徒は前時までに虚数解を使って高次方程式を解く解法を学んでおり、本時では、それ以外の2つの解法についてグループで考えた。（P.27に単元の指導計画を掲載）

既習事項の振り返りのため、小テストを行う。ペアで答え合わせをして、分からなかった部分を教え合う。次に、前時までに取り組んだ例題（虚数解を使う方法）を振り返った後、本時の課題は、同じ例題について、①2次方程式を使った解き方、②3次方程式の解と係数の関係を使った解き方の2通りの解法を導き出すことだと説明した。

すべての生徒が理解するまで
徹底的に待つ指導で、
「分かった」という気持ちを喚起

中山先生のアクティブ・ラーニング

多様な学力層が混在するグループでの 教え合いが生徒の理解を深める

中山育郎先生がアクティブ・ラーニング（以下、AL）に取り組み始めたのは、2014年秋に他校の授業を視察したことがきっかけだった。生徒が数学を楽しみながら生き生きと学び、休み時間になっても生徒同士で教え合う姿や、びっしり書き込まれた模試の解答用紙を見て、



鹿児島県立鹿屋高校

中山育郎 なかやま・いくろう

教職歴13年。同校に赴任して2年目。

数学科担当。1学年担任。

他校の授業を視察したことを機に

アクティブ・ラーニングを始め、実践は4年目になる。

鹿児島県立鹿屋高校

◎旧制鹿屋中学校を母体に鹿屋高等女学校、鹿屋農学校が統合して開校。「知・徳・体」を校訓として、文武両道の実現を目指す。陸上部やボート部など全国レベルの実力を持つ部活動も多い。

◎設立 1923（大正12）年

◎形態 全日制／普通科／共学

◎生徒数 1学年約280人

◎2017年度入試合格実績（現浪計）

国公立大は、神戸大、九州大、九州工業大、長崎大、熊本大、大分大、宮崎大、鹿児島大、北九州市立大などに107人が合格。私立大は、慶應義塾大、同志社大、立命館大、関西大、西南学院大、福岡大などに延べ251人が合格。

◎URL

<http://www.edu.pref.kagoshima.jp/sh/kanoya/>

中山先生の教室では、2つのペアが1グループになり、解法①について考えた。話し合いが停滞してきたら、先生がスクリーンに途中式を映し、「この3次方程式を利用して解くんだよ」「これで因数分解できるはずだよ」などとアドバイスをする。最後に途中式を示しながら、改めて先生が解法①について整理。制限時間の15分が経過したところで、クラスを元に戻した。

4人グループが、いったん解法①を考えるペアと解法②を考えるペアに分かれる。解法②を考えるペアは、同じ時間に同じ内容の授業を行う隣の教室に移動し、隣の教室からは解法①を考えるペアの生徒が、中山先生が教える教室に移動した。そのようにしたのは、異なる解法について話し合うペアの声が聞こえないようにして、自分たちの課題に集中させるためだ。

衝撃を受けた。「講義だけの授業では限界があることに気づかされました」と、中山先生は当時に振り返る。

今でこそ、活発に学び合う生徒の姿が見られるが、鹿屋高校に赴任した当初は、前任校での指導法が通用せず、試行錯誤した。前任校では、話し合いながら考える活動に生徒はすぐになじんだが、現任校では、広範囲で多様な中学校から生徒が進学してくるという状況もあつてか、意見を述べたり質問したりすることをためらう姿がよく見られた。そこで、生徒に協働学習の意義を繰り返し伝え、課題の内容やグループワークの進め方を工夫することで、徐々に学び合う雰囲気が醸成されていったという。

今回の授業は、1年生「数学Ⅱ」の「因数定理と高次方程式」(6時間)の最終回だ。「 $x^2+ax+b=0$ 」の解である時、実数 a 、 b の値とほかの解を求めよ」という例題について、グループで話し合っ2つの解法を考える。習熟度別に演習を行うために時間割をそろえていることから、グループワークでは、中山先生が担当する3組とほかの教師が担当する隣の4組の生徒を半分ずつ入れ替えて、1つの教室で同じ解法を考えるようにした。

「もう1つの解法の情報を遮断して、自分たちの解法に集中して考えられる環境を整えようと同時に、元のグループに戻って解法を教え合う際の発見や驚きを大切にしようと考えました」その形式でグループワークが行えるよう、各

単元に入る前に1年生の数学を担当する3人の教師で話し合い、どの授業時間で入れ替えを行うのかを決め、授業進度や教え方をそろえた。

グループワークでは、分かった生徒やグループに教えてもらえるように、教室を移動してもよいことにした。

「成績上位層の生徒が周りを引っ張ってくれたり、生徒同士で教え合ったりすることを、生徒が楽しむようになったと感じています。授業で私が説明する時間は大幅に減りました」

思考の活性化・深化への配慮

生徒が自力で答えを導き出せるように支援する

中山先生が授業で最も留意しているのは、生徒自身が考え、自力で解答できるよう支援することだ。授業では毎回問いを出す、先生は、スクリーンに途中式を映し、「 x の横にはどんな値が入る?」「教科書の〇ページを見てごらん」などと少しずつヒントを出しながら、生徒自らあるいはグループが、自力で答えにたどり着くように導く。クラス全体の理解度を高めるために、クラスに1人でも気づいた生徒が出たら、各グループの代表がその生徒に聞きに行き、理解した内容をグループに説明することもある。

「初見の問題でも、自力で解く力をつけさせたいという思いが根底にあります。そのため、毎回の授業は『なぜぞ大会』というのが、私の

説明を受けた解法を使って自力で解けるかを、各自で確認。最後に、2つの解法のポイントを中山先生が改めて解説し、解けた生徒には類題に取り組むよう指示して授業は終了した。授業終了後も生徒同士で説明し合う光景が10分以上も続いた(写真は授業後の様子)。

元の4人グループに戻り、解法①を考えたペアと解法②を考えたペアがそれぞれの解き方を5分間で説明し合う。「まず a の値を出して……」「ここに -2 を代入して……」と、何度も計算式を書き直しながら説明していた。自分の説明に自信がない場合は他グループに聞いてもよい。中山先生は各グループを回り、説明に苦戦しているグループにアドバイスをした。

スタンスです。生徒の答えを粘り強く待つことで、予想していない解法が出てくる場合もあります。私自身、いつ答えが出てくるかと楽しみながらアドバイスをしています」

もう1つ大切にしていることは、生徒全員が理解することだ。生徒の理解度を確認するために先生が行うのが、生徒全員をその場に立たせ、理解した者は座るという方法だ。今回の授業でも、中山先生が黒板に3次方程式を示し、「解と係数の関係が理解できたら座って」という場面があった。生徒は既習のプリントを確認して理解できたら座り、分からない生徒は座った生徒に質問していた。その間、着席した生徒はプリントの類題に取り組む。中山先生は全員が理解するまで待ち、それでも分からない生徒には個別に解説することもある。

「生徒には、クラス全員が理解するまで待つと伝えていきます。教師が待つことを我慢できなければ、生徒も諦めて、最後まで解こうとしなくなるでしょう。1人も置きざりにしないという姿勢を見せることで、分らないことは恥ずかしいことではないという意識が共有され、友人と積極的に学び合う雰囲気育まれます」

場づくりへの配慮

生徒にアウトプットの大切さをしっかり説明する

中山先生は、初めて受け持つクラスには協働

学習の意義を伝えるところから始める。自分が理解したことを人に伝える力は、数学の学習に限らずどんな場面においても大切であり、ALはそのトレーニングにもなる。そして、他者に説明したり、考えを書いたりすることでより理解が深まると説明し、「勉強＝知識を覚える」という生徒の意識を変えていく。

また、全員に起立させる方法を行うこともあるが、それは話し合いをしやすい環境をつくるための配慮でもある。立ち上がった方が、席の離れた生徒にも質問しやすくなり、おのずと話し合いが活性化するからだ。また、理解した生徒を立たせ、座っている生徒のところにアドバイスに行かせる方法を探ることもある。

時には、全員の生徒が答えられないと思われる難しい問いを投げかけ、数学が得意な生徒、不得意な生徒が一緒になって考える場面をつくることで、分からないことを認め合う意識を定着させているという。

成果と課題

数学が苦手な生徒も授業に一生懸命取り組むように

1年生が入学してから約1年。ALを取り入れた授業が続けてきた成果は、生徒たちの学ぶ姿に表れている。授業後、休み時間にも教え合う生徒の姿があちこちで見られ、入学時に生徒の半数以上が数学が苦手と言っていた状況から

単元の指導計画

【教科・科目】数学Ⅱ 【分野・単元】いろいろな式・高次方程式 【テーマ・作品】因数定理と高次方程式 【設定時数】6時間の中の6時間目
 【単元目標】①剰余の定理や因数定理を用いることで、高次方程式の種々の問題を理解し、解くことができる。 ②理解した内容を説明することで、思考力・表現力や主体的に学ぶ力をさらに高める。

時数	学習内容	身につけさせたい資質・能力	授業の流れ	教師の配慮	評価方法
1	剰余の定理	- 得られた結果を元の事象に戻してその意味を考える力 - 得られた結果を基に拡張・一般化する力 - 数学的な問題を解決するための見通しを立てる力 - 数学的な見方・考え方を基に、的確かつ効率的に処理する力【知識・技能、思考力】	①整式に代入することができるか確認をする。 ②代入して出てきた値にどんな意味があるかを考察する。 ③剰余の定理を理解する。 ④剰余の定理を用いた問題に取り組む。	【主体的な学び】 簡単な例を用いて割る式と余りの関係を質問する。分からない時は少しずつヒントを与える。 【対話的な学び】 1人で考える時間、周囲と相談して考える時間を設定する。 【深い学び】 導き出した解答をプレゼンテーションソフトのスライドに合わせて全員で発声し、振り返ることで考え方を整理する。	
2	因数定理	- 既習の知識と結びつけ、概念を広げたり深めたりする力 - 数学的な問題を解決するための見通しを立てる力 - 一定の手順に従って数学的に処理する力【知識・技能】	①因数定理が剰余の定理の特別な場合であることを理解する。 ②因数定理を用いて3次式の因数分解をする。 ③簡単な因数分解により、3次方程式を解く。	【主体的な学び】 簡単な因数分解の問題を質問する。分からない時は少しずつヒントを与える。 【対話的な学び】 1人で考える時間、周囲と相談して考える時間を設定する。 【深い学び】 導き出した解答をプレゼンテーションソフトのスライドに合わせて全員で発声し、振り返ることで考え方を整理する。	小テスト
3	因数定理	- 数学的な問題を解決するための見通しを立てる力 - 数学的な見方・考え方を基に、的確かつ効率的に処理する力【技能、思考力】	①1の3乗根の性質を理解し、式の値を求める。 ②複2次式の4次方程式を解く。 ③因数定理を用いて、3次方程式を解く。	【主体的な学び】 前時までの復習の内容から解けることを伝え、安心感を与える。 【対話的な学び】 1人で考える時間、周囲と相談して考える時間を設定する。 【深い学び】 導き出した解答をプレゼンテーションソフトのスライドに合わせて全員で発声し、振り返ることで考え方を整理する。	小テスト
4	因数定理	- 数学的な問題を解決するための見通しを立てる力 - 既習の知識と結びつけ、概念を広げたり深めたりする力【技能、思考力】	①4次方程式を解く。 ②虚数解を代入することで3次方程式の係数を決定する。	【主体的な学び】 分からない時は少しずつヒントを与える。 【対話的な学び】 1人で考える時間、周囲と相談して考える時間を設定する。 【深い学び】 導き出した解答をプレゼンテーションソフトのスライドに合わせて全員で発声し、振り返ることで考え方を整理する。	小テスト
5	問題	- 一定の手順に従って数学的に処理する力 - 目的に応じて、自分の考えなどを数学的な表現を用いて説明する力【技能、思考力、表現力】	問題演習	【対話的な学び】 グループをつくり、理解できていないところはグループ内で相談し、解決させる。	
6	高次方程式とその解	- 既習の知識と結びつけ、概念を広げたり深めたりする力 - 数学的な問題の本質を見いだす力 - 数学的な見方・考え方を基に、的確かつ効率的に処理する力 - 多面的に考え、粘り強く問題の解決に取り組む態度 - 目的に応じて、自分の考えなどを数学的な表現を用いて説明する力【知識・技能、思考力、表現力、主体性】	①小テストやパワーポイントのスライドを利用して、既習した事項を確認する。 ②4人グループを構成し、いったん2人ずつに分かれ、それぞれが別解を考える。 ③元のグループに戻り、自分の解答を紹介し、理解させる。 ④理解したもう1つの解法を再現する。	【主体的な学び】 分からない時は少しずつヒントを与える。 【対話的な学び】 グループを巡視し、議論が停滞しているグループにヒントを与える。解決したグループから解決していないグループへ説明者を派遣する。説明する時に要点を明確化するように指示する。2人で協力して説明するように指示する。 【深い学び】 パワーポイントのスライドに合わせて解決した解答を全員で発声し、振り返ることで考え方を整理する。	自己評価シート

*中山先生作成の単元の指導計画を基に編集部で作成

生徒の声



大きく様変わりした。定期考査で思うように得点できなくても、中山先生の授業は楽しいという生徒も増えている。

中山先生は、生徒が考える時間をなるべく多く設けようと、板書はプレゼンテーションソフトを使って投影するなど、多様な工夫をしている。今後の課題は、タブレットなどのICT機器を活用した授業をどうつくり上げていくかだ。

「数学が苦手な生徒でもひと目で理解でき、復習しやすい資料になるよう、教材の改善を図りたいと考えています」

田口颯真さん 中学校時代は数学が苦手で、授業についていけずに苦労しましたが、中山先生は分かるまでつき合ってくれるので、苦手でも前向きに学習できるようになりました。友人と一緒に考えるのが楽しく、授業後もグループで話を続けることもよくあります。2年生になっても、主体的に学んでいく自信ができました。

寺田みのりさん 元々質問するのが苦手だったので、最初は友人に分からないことを聞いたり、自分の意見を述べたりすることに抵抗感がありました。でも、中山先生の授業では、分からないことがあっても周りに聞いて、理解した上で勉強を進められるので安心感があります。そうした経験から、分からないことをそのままにせず、解決してから先に進む習慣がつき、他教科でも先生や友人に質問できるようになりました。

東京都立富士高校・附属中学校

進学実績向上

「富士山型の人間形成を 図る指導で、5教科の 総合的な学力向上を実現

変革のステップ

背景と課題

- 高校低学年次から中堅私立大学への進学を目標とし、力を入れる教科・科目を絞るなど、進路意識に課題がある生徒が少なくなかった

実践内容

- **裾野の広い学力の形成** 「富士山型の人間形成」をスローガンとし、5教科の学力をバランスよく高める教育方針を教師・生徒・保護者で共有
- **進路意識の醸成** 首都圏を中心とする国公立大学が各大学の特色を伝える国公立大学ガイダンスを設けたり、高校1・2年次にセンター試験を体験受験したりといった、進路意識を高める取り組みを推進
- **生徒の実態把握を強化** ICTサービスを導入し、家庭学習時間調査を効率化。その後、教師間の合意形成を進めながら、模試データを蓄積したり、生徒とのコミュニケーションを深めたりするための機能を段階的に拡充していった

成果と展望

- 2016年度に東京大学に2人が現役合格。17年度には国公立大学合格者が50人を超えた
- 生徒と教師の信頼関係が深まった

東京都立富士高校・附属中学校は、100年近い歴史を持つ学校だ。今では毎年のように合格者を送り出しているが、以前は積極的に上位の大学を目指すとする生徒が少なく、高校低学年次から中堅私立大学への進学を目標とし、力を入れる教科・科目を絞る傾向が見られた。教師側にも、「国公立大学を勧めても生徒には響かない」といった先入観があったと言う。そうした課題に対応するため、2010年度に併設型中高一貫校となったのを機に、指導改善に着手した。「難関国立大学5人、国公立大

国公立大学への合格を目標に、
5教科の学力を総合的に向上させる

PROFILE



旧制・東京府立第五高等女学校として開校。富士山を望む高台に位置する。文武両道の実現に力を入れ、東京都の「理数アカデミー校」や「英語教育推進校」「スポーツ特別強化校」などの指定を受けている。

設立 1920（大正9）年

形態 全日制／普通科／共学

生徒数 1学年約200人

2017年度入試合格実績（現浪計） 国公立大は、筑波大、埼玉大、千葉大、東京藝術大、東京工業大、一橋大、首都大学東京、横浜市立大などに51人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、中央大、法政大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ497人が合格。

住所 〒164-0013 東京都中野区弥生町5-21-1

電話 03-3382-0601

Web site <http://www.fuji-fuzoku-c.metro.tokyo.jp/>

学50人」という進学実績の目標を掲げ、その達成に向けたスローガンとして、「富士山型の人間形成」を打ち出した。当時を知る進路学力部主任の松本高明先生は、次のように語る。

「社会のどの分野であつても、問題を解決し、前に進むためには、幅広く、そして高い



東京都立富士高校・附属中学校統括校長
上野勝敏 うの・かつと

教職歴37年。同校に赴任して4年目。「生徒の心を耕し、失敗をグッドトライと捉えて挑戦を楽しむ人を育てたい」



東京都立富士高校・附属中学校
松本高明 まつもと・たかあき

教職歴33年。同校に赴任して6年目。進路学力部主任。「保護者との信頼関係を築きながら、生徒のための指導を心がける」



東京都立富士高校・附属中学校
町田清彰 まちだ・きよあき

教職歴24年。同校に赴任して5年目。主幹教諭。高校1学年主任。「生徒の心に入り込み、人間として信頼される教師でありたい」



東京都立富士高校・附属中学校
本間武志 ほんま・たけし

教職歴21年。同校に赴任して4年目。主幹教諭。「学・心とは心に誠実を刻むこと。教えるとはともに希望を語ること」



東京都立富士高校・附属中学校
池田憲弘 いけだ・のりひさ

教職歴12年。同校に赴任して5年目。進路学力部主任。「教育のおかげで今の自分がある。その恩を次世代の子どもたちに返したい」



東京都立富士高校・附属中学校
今福航 いまふく・わたる

教職歴7年。同校に赴任して2年目。進路学力部主任。「生徒に嘘をつかず、ごまかしをせず、正直に向き合う」

学力が欠かせません。そこで、高校時代から、裾野の面積も標高も日本一である富士山を目標にしてほしいと考えました。生徒・保護者には、5教科の学力をバランスよく高めていく大切さを伝えた上で、その延長線上に5教科が必要な国公立大学の受験があることを訴えていくことにしました」（松本先生）

中だるみしがちな高校2年次に、進路への意識づけを徹底

各学年団では、成績上位層の生徒を対象とする数学・英語の早朝・放課後講習や、家庭学習習慣の定着を目的とする学習時間調査、模試データの分析、志望校検討会の定例化といった学力向上のための取り組みを充実させていった。特に重視したのは、中だるみの傾向が見られる高校2年次であり、進路意識の醸成を最重要課題として位置づけた。まず、初めて志望校を書くことになる7月のベネッセの「進研模試」に向けて、国公立大学への意識づけを強化しようとして、6月に国公立大学ガイダンスを実施することにした。首都圏を中心とする8つの国公立大学から教職員を講師として招き、2週間、毎日放課後に1大学ずつ、その大学で学べる内容や国公立大学に進学するメリットなどについて講演してもらった。生徒の目を地方国公立大学にも向けさせるという方針の下、1大学は必ず首都圏以外の大学も招き、生徒には2大学以上を受講するよう指導した。

「夏季休業期間には、国公立大学を中心にオープンキャンパスへ参加するよう呼びかけています。大学で学びたい学問が具体的にイメージできるようにすれば、高校2年次秋の科目選択にも目的意識を持って臨めるようになると考えました」（松本先生）

センター試験の体験受験で、大学入試への意識を高める

希望進路にかかわらず、センター試験は全員が受験するという方針も、高校低学年次から生徒・保護者に繰り返し伝えていく。その一環として、高校1・2年次にはセンター試験を体験受験するよう指導している。主幹教諭で高校1学年主任の町田清彰先生は次のように話す。

「体験受験は、本番のセンター試験で8割以上得点するために、今後、どこを強化していけばよいのかを考えるきっかけになります。1年生は解けない問題の方が多いですが、既習の分野・単元からの出題であっても定期考査とはひと味違うことを体感し、3学期以降の学習につなげてほしいと考えています」
そうして国公立大学志望者を増やす一方、志望を固めた生徒に対しては、学習と精神的な支援を徹底している。例えば、高校2年次2月の難関国公立大学ガイダンスでは、卒業生を講師として招き、「『3年次0学期』の今から何をしておくべきか」をテーマに、具体的な勉強方法を、自身の体験談を交えながら語ってもらう。

また、3年次6月からは、難関国公立大学志望者を対象とした個別面談を随時行う。進路学力部の教師が1人10人前後の生徒を受け持ち、現在どのような学習をしているのか、添削指導はどの教科担当に頼むのか、夏季休業期間はどのように過ごす予定なのかなどについて尋ね、その情報は学年団と共有している。

生徒の実態把握の効率化に向け、「Classi」の活用を段階的に推進

17年度からは、さらなる指導改善を目指し、「Classi」(*)を活用している。その背景には、進路行事の増加や、きめ細かな指導を徹底したことによる教師の負担の増加がある。例えば、町田先生の学年では、中学1年次から、毎朝SHRにおいて生徒が前日の家庭学習時間を紙のシートに記入していた。3年間継続する中で、その効果を感じる一方、データの集計などを効率化できないかと考えるようになったと言った。

導入にあたっては、ICTに戸惑う教師が出ないよう配慮した。最初は学習記録機能を中心とするいくつかの機能のみの導入とし、教師が慣れてくるタイミングを見計らいながら、生徒の実態や学年団の課題に応じて、活用する機能を徐々に増やしていった。Classiの管理を担当する進路学力部の池田憲弘先生は、こう述べる。

「ICTサービスは、実際に使用してみないと、そのよさを実感しづらいため、最初から全教師の納得を得ようとするのではなく、

まずは部分的に導入してとにかくClassiに触れてもらうことを優先させました。そうして、ICTサービスのよさへの理解を徐々に深めていくとともに、新機能を取り入れる際には、必ず各学年会議で検討して合意形成を図り、段階的に導入を進めていきました」

現在では、探究活動の資料やレポート、進研模試の分析結果などを学年団で共有したり、アンケート機能を用いて行事ごとに生徒が振り返りをしたりと、活用の場が大きく広がっている。また、学校の取り組みや生徒の現状を知りたいという保護者の要望にこたえるべく、週に1回程度、行事に取り組み生徒の様子や教師の思いを、Classiを通して保護者に発信している。

Classiは、生徒と教師のコミュニケーションツールとしても活用されている。例えば、学習記録を入力する際、コメント欄に日々の出来事や思いを書く生徒が増え、それを見た担任が、コメントを返すようになった。そうした学級日誌のような双方向のやり取りにより、生徒と教師の関係性が深まっている(図1)。進路学力部で高校1学年担任の今福航先生は、こう話す。

「教師に直接声をかけにくくても、Classi上であれば自分の思いや考えを率直に伝えられるという生徒も少なくありません。コメント欄に書かれた話題について面談で話し合うこともでき、多くの生徒とより緊密なコミュニケーションが取れるようになりました」担任以外にも、生徒のコメントに返信したり、

コメントの内容を踏まえた声かけを行ったりする教師が次第に増えていった。すると、「先生が自分を見てくれている」「自分の努力を認めてくれる」という思いが生徒の中に生まれ、それが教師への信頼感を高めている。

「教科学力にとどまらず、これからの社会を生きていくためには多様な資質・能力が求

Classiの学習記録機能を活用する中で、日常生活での出来事などについてコメントする生徒が増え、それを見た教師もコメントを返すようになった。本音を率直に書く生徒が多く、教師とのやり取りが活発に行われている。

*学校資料を基に編集部が一部改編

図1

Classiの「学習記録」のコメント欄



* 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社であるClassi 株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。

図 2

Classi の「生徒カルテ」

今回の成果（良かった点）と課題（良くなかった点）について、それぞれ5つ以上感じたことを記述してください。	国語 物語文読み進めちゃって疲るわなかった。 古文は助動詞や単語の意味が弱いし、以外と配点高くて痛い。 英語 文法問題の次問4がダメだった... 数学 基本的な二次関数ができてつもりで大分楽てた。二次方程式や場合の数は応用力がついてきた。
前日7月の模試と比較して各教科どうだったか感じたことを記述してください。	国語はもっとできた。物語と古文確実にとりたい。一番わかるのが現代文なのはなんか...。 英語は大分つかんできた。時間足りないからもっと正確に早くやりたい。 数学はほんとにまだまだ。危機感ばかり。過去問ではもうちょっといけてたのに。ど忘れ多い。反復練習で定着させたい。
次回の2月模試に活かすことを1つ記述してください。	数学は模試の範囲の問題集を。基本だけでもときなおしておく。次こそ数学で足を引っ張りたくない。国語は古文で確実にとれるように助動詞とかの記憶を確実にしておく。英語は長文のスピードを付ける。

進研模試の振り返りとして、生徒が Classi 上に自己採点結果や今後の課題とその対策などを書く。今後は、文化祭や合唱祭といった行事を始め、あらゆる教育活動の履歴をポートフォリオとして蓄積していく予定だ。

*学校資料を基に編集部が一部改編

められます。数値化できないものも含め、教師がきちんと見取ることが重要です。例えば、教科学習でつまづいている生徒に、『君が皆をフォローしてくれたから、合唱祭がうまくいったよ』と声をかければ、生徒は自信を取り戻すことができ、教科学習や大学入試にもまた向き合えるようになります」（池田先生）

現在は、Classi の生徒カルテ機能の活用をより充実させることを検討中だ。これまでは模試などの振り返りでの活用が中心だったが、今後はあらゆる教育活動を記録し、振り返らせるこ

とで、生徒が持っている資質・能力を可視化し、その変容や成長をメタ認知できるようにしていきたいと考えている（図2）。

国公立大学受験を見据えた、個別指導体制の整備を急ぐ

一連の取り組みにより、5教科のバランスの取れた学習が、同校の指導のスタンダードとして定着した。それは、進学実績の向上へと結びつき、指導改善に力を入れ始めた学年である附属中学校第1期生が受験した16年度入試では、2人の生徒が東京大学に現役合格した。「自分も先輩に続こう」という思いの下、高い目標を設定して学習に取り組む生徒が目立つようになり、17年度入試では、中高一貫校になって初めて国公立大学の合格者が50人を超え、とともに、早稲田大学の合格者も過去最高を記録した。上野勝敏校長は次のように述べる。

「国公立大学への意識づけの強化によって、難関私立大学の合格者数が減るかもしれないと思っていましたが、実際は増えました。裾野の広い学力を身につけていけば、おのずと私立大学入試にも対応できるようになるのだと実感しています。また、進路の視野も広がり、地方国公立大学への合格者が毎年出るようになりました」

Classi を活用した指導も根づきつつあり、生徒の学習意欲が向上している。導入当初よりも前向きなコメントを書く生徒が多くなり、授業

をしていて生徒の信頼を感じるという教師が増えている。18年度に高校1学年主任に就任予定の本間武志先生は、次のように分析する。

「常に生徒のために何ができるのかを考え、先生方のニーズを踏まえながら、Classi の機能を拡充してきた結果だと思います。また、先生方と目線合わせができていないと、指導への活用に差が出てしまい、生徒を混乱させることにもなりかねないため、『富士山型の人間形成』という指導方針を教師間でしっかりと共有できている点も効いています。18年度1学年でもこの流れをうまく引き継いでいきたいと考えています」

指導改善が大きく実を結びつつある同校だが、教師たちの意識は次の目標に向かっていく。次期進路学力部主任に就任予定の田村嘉信先生のリーダーシップの下、Classi の今年度への波及、国公立大学受験を見据えた個別指導体制の整備といった課題に、一つひとつ取り組んでいく考えだ。前者については、池田先生を中心に活用ノウハウの継承を図る。後者については、苦手教科・科目に関する個別相談に応じる担当教師を、各学年に配置できるよう計画している。

「教師は生徒の期待に応えようとして指導力を伸ばし、その積み重ねによって学校全体が活性化していきます。指導改善に終わりはありません。今後も、生徒がより高い目標を実現できるよう、先生方と力を合わせていきたいと考えています」（上野校長）

岐阜県立中津高校

キャリア教育

体系的な進路探究活動と
ボランティア活動で、
主体的な学習集団を育成

変革のステップ

背景と課題

- 大学入試に向けた準備を始めるのが遅い生徒が多く、進路意識の涵養に課題があった

実践内容

- **弁論大会の改編** 1・2年次の弁論大会を、小論文指導を中心とした取り組みから、進路探究活動を中心とした取り組みへと改編。特に1年次には、生徒が「自分は何に興味があるのか」というテーマとじっくり向き合えるようにした
- **地域と連携し、ボランティア活動を推進** 生徒の視野を広げるため、旧中山道「馬籠宿」における通訳を始めとした、地域と連携して行う多様なボランティア活動を推進
- **保護者向け進路勉強会の実施** 年8～9回、保護者を招いた勉強会を実施し、大学入試や就職、校内の取り組みなどの情報を共有

成果と展望

- 「自分ならではの体験」を語れる生徒が増え、推薦・AO入試の合格率が向上
- 学校と生徒・保護者との信頼が深まった

キャリア教育を充実させ、自分の将来像を描ける生徒の育成を図る

岐阜県立中津高校は、創立100年を超える歴史を持つ学校だ。同県南東部に位置する東濃地区では唯一の単位制普通科高校として、地域の発展を牽引する人材の育成を目指している。毎年、生徒の約7割が4年制大学に進学し、進学実績が安定している半面、生徒の進路意識の育成には課題があった。大学入試に向けた準備を本格化させる時期が遅くなる傾向が見られ、3年次の夏季休業に入ってからようやく腰を上げる生徒も少なくなかった。そこで、キャリア教育に力を入れようと考え、1・2年次のLHRや「総合的な学習の時間」を中心に、取り組

PROFILE



旧制・中津町立中津高等女学校として開校。「自由と個人の尊厳・思索と自己の完成」を校訓とし、主体性や社会性を備えた生徒の育成を目指している。2007年度の岐阜県立恵那北高校との統合を機に、単位制に移行した。

設立 1906（明治39）年

形態 全日制・定時制／普通科／共学

生徒数 1学年約200人

2017年度入試合格実績（現浪計） 国公立大は、東北大、千葉大、横浜国立大、富山大、信州大、岐阜大、静岡大、名古屋大、広島大、岐阜県立看護大などに64人が合格。私立大は、青山学院大、東京理科大、愛知学院大、南山大、立命館大などに延べ245人が合格。

住所 〒508-0001 岐阜県中津市中津川1088-2

電話 0573-66-1361

Web site <http://school.gifu-net.ed.jp/nakatsu-hs/>

みを充実させることにした。教務主任の高橋俊和先生は、次のように語る。

「大学進学という人生の大きな岐路において、本当に進みたい道を選ぶためには、目的意識が欠かせません。そこで、生徒が進路の視野を広げながら、『大学で何を学びたいのか』『社会で何がしたいのか』をしっかりと考えられるよう、全校体制で指導を工夫していくことにしました。目標が固まれば、学習意欲の向上にもつながると考えました」

弁論大会の中軸を進路探究とし、生徒が好きなテーマを掘り下げる

キャリア教育を推進する中で、2つの柱が設



高橋俊和 たかはし じゅん
岐阜県立中津高校 教職歴32年。同校に赴任して9年目。教務主任。「生徒の心に火をつける支援」と



小栗和成 おぐり かずしげ
岐阜県立中津高校 教職歴31年。同校に赴任して4年目。進路指導主事。「生徒自身の夢の実現を支援すること」



喜多川博 きたがわ ひろし
岐阜県立中津高校 教職歴17年。同校に赴任して5年目。1学年主任。「仕事に対しては『現状維持は失敗』、生徒に対しては『誠心誠意』の信念で臨む」



西山敏伸 にしやま としのぶ
岐阜県立中津高校 教職歴16年。同校に赴任して6年目。進路指導部。「仕事も授業も『明るく、楽しく、元気よく』。生徒との信頼関係の構築を大切に」

けられた。1つは、体験的な進路学習だ。1年次の夏季休業前には、主要な学問系統について広く学ぶための教師による学部学科説明会、夏季休業明けからは、地域企業の見学会や、大学・企業を訪問して学問系統別の講座を聞く秋季研修(図1)などを通して、進路への視野を広げる。2年次には、病院や市役所などへのインターンシップを中心に、実際に社会に出て体験する場を設けている。

もう1つは、1・2年次の弁論大会だ。同校の伝統的な取り組みであり、以前は、小論文のスキルの育成を目指し、論述・発表の指導に重点を置いていた。しかし、「興味のあるテーマが見つからない」と言う生徒も多く、思うような成果が得られていなかった。そこで、「生徒の進路への考えをいかに深めさせるか」という観点で内容を改編し、2016年度からは、各学年の進路探究活動の集大成と位置づけることにした。

各学年ともに、3学期の弁論大会本番に向け、2学期から準備を始める。1年次では、生徒一人ひとりがマインドマップを用いて、自分の関心のある分野を探る中でテーマを設定。それについて書籍やインターネットで調べ、弁論大会の原稿に用いる小論文のアウトラインを書く。自分の考えや主張を必ず盛り込むよう繰り返し伝え、調べた事実しか書かれていない場合は書き直すよう指導している。そして、冬季休業中に、1200～1500字の小論文に取り組

図1 2017年度秋季研修テーマ一覧

講座名	研修場所	テーマ	参加人数(人)
文学	南山大学、愛知県図書館	文学研究とは何か・図書館とは何か	24
語学・国際	日本福祉大学	国際理解・国際協力について考える	17
経済・経営	南山大学、三菱東京UFJ銀行貨幣資料館	貨幣をキーワードに経済学の間口の広さを知る	19
教育・保育	岐阜聖徳学園大学	教育学・保育学の内容を知り、体験しよう	28
理学	南山大学理工学部	大学の数学を知る	5
工学	愛知工業大学、トヨタ産業技術記念館	中部圏のものづくりと大学の研究を知る	39
医療・看護	中部大学	医療と看護の分野とその実際について学ぶ	36
芸術	名古屋芸術大学	将来の職業を視野に、芸術系学部で学ぶことを知る	13
生活科学	中京学院大学	栄養・食品学について	4

生徒が興味のある分野について探究し、希望進路の実現への意欲と関心を高められるよう、事前学習3時間、事後学習1時間と、当日の1日を使って、学問系統別に研修している。 *学校資料を基に編集部で作成

む。LHRで小論文指導を行っていることもあり、「書き方が分からない」と言う生徒は少ない。17年度1学年主任の喜多川博先生は、こう話す。「テーマは、できるだけ自分の進路にかかわる内容になるよう指導しています。探究する中で、『興味を持っていた分野なのに全く知識がないことが分かった』『調べ始めたら

意外と面白くなかった』と言う生徒もいました。学問を深める難しさを実感し、自分の適性を知るよい機会になっていると思います」

3学期には、書き上げた小論文を用いて弁論の練習が始まる。4人1組で発表し合い、率直な感想や意見を述べ合う。そのアドバイスを基に、発表の仕方や内容などを修正した上で、各クラスで発表会を開く。内容、構成の分かりやすさ、主張の明確さ、発表の態度の4観点について、各5段階で生徒が相互評価し、感想も書き添える。そうして各クラスから代表者を1人ずつ選拔し、学年で弁論大会を行う(写真1)。

17年度1年生では、命の大切さをテーマにした生徒が最優秀者となった。命への真摯な思い、身振り手振りを交えた巧みな語り口に心を打た

写真1 1年生のクラス代表者が、「最小限主義という生き方」「体育の意味」「日本の農業の課題」「不滅の意見」といった様々なテーマで発表。黒板を使って説明したり、プロジェクターで写真や絵画を示したりと、自分の考えを分かりやすく発表しようとする工夫が見られた。

れ、目頭を押さえる教師や生徒も少なくなかったという。生徒の感想にも、「自分の主張がいかに底の浅いものであるかに気づいた」「2年次では、もっと自分の考えを盛り込みたい」といった感想が多く、クラス代表者の発表に大きな刺激を受けていることがうかがえたという。

2年次は、基本的に1年次と同じ流れで進むが、準備期間でさらに探究を深めるために、クラス横断で学問分野ごとに10〜12のゼミに分かれ、小論文の作成に取り組む。1年次と同じテーマにしても、変えても構わない。担任と副担任が、自身の担当教科に近い分野のゼミの顧問として指導に当たる。

小論文にゼミ形式で取り組むようになってから、11月に行う大学教員を講師として招く出前講義への生徒の興味が高まっているという。進路指導主事の小栗和成先生は、次のように話す。

「生徒は、講師が語る研究の方法や発見の喜びなどを、現在の自分の探究活動と重ね合わせ、実感を伴って聞けるようになったのだと思います。各教育活動が互いに影響し合い、相乗効果が生まれることによって、生徒の気づきや学びが深まっていくのだと、改めて実感しました」

地域と連携したボランティア活動を推進し、生徒の視野を広げる

生徒のキャリア形成の機会として、地域とのつながりを生かしたボランティア活動も重視し

ている。そのきっかけは、生徒が青年会議所の協力の下に行った、学校祭や街頭での献血の啓発活動だった。それ以降、中津川市役所や商工会議所、法人会、中京学院大学との連携も進め、JR中津川駅前で行われる定期市「六斎市」で販売する商品を開発したり、吹奏楽部やギターマンドリン部による演奏会を開いたり、様々な取り組みが実現していった。

15年度からは、同校が拠点校を務める「岐阜県英語教育イノベーション戦略事業」の一環として、同市の観光名所の1つである旧中山道の宿場町「馬籠宿」^{まごめじゅく}でのボランティア活動を行っている。年3〜4回、外国人観光客に対して、生徒が通訳をしたり、道案内をしたりするほか、商店から依頼を受け、商品を広告するチラシを作成することもある。地域の産業への理解を深め、視野を広げる機会となるため、生徒には積極的な参加を呼びかけている。進路指導部で英語科の西山敏伸先生は、教科学習への意識づけにもつながる取り組みだと語る。

「生徒が授業で身につけた英語力を活用できるよう、実際に外国人と交流する場を設けたいと考え、本校から観光協会に協力をお願いしました。協会からは快諾が得られ、さらに要望も挙げてもらい、企画が一気に具体化していききました」

16年度には、地域との結びつきをさらに強化し、地域貢献を進めるため、ボランティアを行う部活動「CCC(コミュニティー・コネクション

ン・クラブ」を設置した（写真2）。生徒全員が所属する部活動として位置づけることで、ボランティア経験の少ない生徒でも気軽に参加しやすくなり、興味のある地域行事を意欲的に手伝うようになったという。

「保護者との勉強会により、 「受験は団体戦」の意識を醸成

生徒の進路への意識づけを効果的に進めるため、保護者への進路情報の共有も最重要課題として位置づけている。

その中心的な取り組みが、年8〜9回行う「保護者のための進路サポート勉強会」だ。教師と保護者の距離を近づけるため、あえて体育館などではなく、会議室で膝を突き合わせて行う。

写真2 CCCでは、全校生徒が部員となり、全教師が顧問を務める。病院の防災訓練を手伝ったり、児童館や福祉施設の行事に参加して子どもに読み聞かせを行ったりといった多彩な活動を通して、地域貢献を図っている。発足初年度である2016年度には、延べ412人の生徒がボランティア活動に取り組んだ。

また、仕事を持つ保護者も参加しやすくなるよう、時間は19時〜20時30分に設定している。テーマには、大学進学費用（4月）や、大学入試の最新動向（6月）、センター試験の出願（9月）といった一般的な情報のほか、難関大学に合格した卒業生の足跡といった同校独自の情報も盛り込み、保護者の満足度を高められるよう工夫している。また、親子で話し合っほしいテーマについては、同日の昼間、同じ講演を生徒向けに行うことも多い。以前は、会場の準備に手間がかかったが、管理職の配慮とPTAの協力によって会場棟の1階に保護者用の下足箱とスリッパを設置し、会議室に椅子150席を常備してからは、教師の負担が大きく減少した。

保護者からの評判は良好で、繰り返し出席する保護者も目立ち、多い時には学年の40〜50%の保護者が足を運ぶ。校区の中学校の教師が参加することもあり、「面倒見のよい学校」という評価も定着しつつあるという。

「生徒が本当に進みたい道を選ぶためには、保護者の理解と協力が欠かせません。そこで、私たち教師の思いや入試環境の変化を伝える場を定期的に設け、『大学入試は団体戦である』という意識を保護者とも共有したいと考えています」（高橋先生）

一般入試での合格者の増加を 目指し、指導改善を続けていきたい

一連の取り組みによって、将来の志望や大学

で学ぶ意義に気づく生徒が増えている。それは、推薦・AO入試の合格率の高さからもうかがうことができ、例年40〜50%の生徒が合格するようになった。探究活動のテーマ、インターンシップやボランティア活動などをきっかけにその分野を目指し、その生徒にしか語れない体験を積み重ねてきた成果だと言えるだろう。

「取り組みを継続する中で、生徒・保護者の教師に対する信頼感も高まっています。進路決定の場面で、教師のアドバイスに素直に耳を傾ける生徒が増えました。『あの時の先生の一言が背中を押してくれた』と言ってくれる卒業生も多く、教師として大きなやりがいを感じています」（西山先生）

今後は、一般入試での合格者の増加と、さらなる高みを目指す意欲の喚起に向け、指導改善を進めていく。16年度入学生が1年生の時には、旧帝大を始めとする難関国公立大学志望者を対象に、各教科・科目の学習の仕方や心構えなどを伝える説明会を行ったところ、38人の生徒が参加した。そうした各学年の新たな取り組みを学校全体で共有し、改善を重ねていく考えだ。

「意志のあるところにこそ、道は開けます。高いと思えるハードルでも積極的に挑戦し、乗り越えようとする気持ちを持つことが、何よりも大切だと思います。今後も、そうした意欲的な生徒の育成に力を入れ、生徒が秘めている無限の可能性を引き出していきたいと考えています」（喜多川先生）

自校の指導ツールを他校の教師とともに検討し、各校の生徒特性に合った形へ改善を図る本コーナー。今回は、2年生1学期に実施される模試に向けて目的を持った主体的な学習を促す「模試への意識づけシート」について検討する。

2017年7月進研模試の記録

組 番 氏名

教科	評価	反省点と 今後の課題
国語	自己採点 点	
難易度	易 1 2 3 4 5 難	
時間	余裕 1 2 3 4 5 不足	
数学	自己採点 点	
難易度	易 1 2 3 4 5 難	
時間	余裕 1 2 3 4 5 不足	
英語	自己採点 点	
難易度	易 1 2 3 4 5 難	
時間	余裕 1 2 3 4 5 不足	



英語は実際の受験とは異なりますが、②の会話表現を解きましょう。
数学も選択問題を2題解く必要があります。解ける問題を出題範囲であらかじめチェックしておきましょう。
自己採点をしっかり行い、目標点との差から「どこで得点すればよいか」を自己分析して対策しましょう。

千葉県・私立成田高校では、2年生7月のベネッセの「進研模試」に向けて意識を高め、主体的な学習を促す目的で意識づけシートを活用している。5月に前年度の模試の問題を解いて自己採点をし、問題ごとの正答率を確認することで自分の弱点を把握して、模試本番までに強化する分野・単元を明確にすることがねらいだ。しかし、生徒の中には、弱点の確認はできたものの、部活動や学校行事に時間が取られ、具体的な学習行動に結びつかない者もいるという。そこで今回は、生徒にとって多忙さが増す2年生1学期に、主体的な学習習慣を無理なく身につけさせていくための指導について話し合った。

模試の過去問題で自己分析させ、
主体的な学習を促したい

千葉県・私立成田高校
佐藤杏奈先生提供

「2年生 1学期 模試への意識づけシート」

課題

- 1 模試の過去問題を利用した指導を行っているが、主体的な学習習慣の定着に結びついていない生徒がいる
- 2 生徒一人ひとりが学習上の優先課題を見つけ、計画的に学習を進められるようにしたいが、教師が個別に生徒をフォローする余裕がない

検討メンバー



ツール提供者

千葉県・私立
成田高校

佐藤杏奈

さとう・あんな

長野県
屋代高校・
附属中学校

宇都宮 仁

うつのみや・じん

高知県・私立
土佐塾中学・高校

藤澤佑介

ふじさわ・ゆうすけ

*プロフィールは2018年3月時点のものです

2年生 1学期 模試への意識づけシート

After

改良ポイント

1 個人シートで、教科の優先順位と必ずやることを決める

これまでのシートに「最低1日10分はやること」と教科の「優先順位」を記入する欄を設け、自分にとってのスモールステップを明確化する

2 グループシートを使って、グループ間で学習状況を競う

クラスを4～8人程度ずつのグループに分け、毎日「最低1日10分はやること」を達成できた人数分の○を、グループシートのマスに書き込み、その数を競う。グループは学習方法をアドバイスし合う集団としても機能させる

■個人シート

2017年7月進研模試の記録

2年		組	番	氏名		
教科	評価			反省点と 今後の課題	最低1日10分は やること	優先 順位
国語	自己採点	点				
	難易度	易	1 2 3 4 5	難		
	時間	余裕	1 2 3 4 5	不足		
数学	自己採点	点				
	難易度	易	1 2 3 4 5	難		
	時間	余裕	1 2 3 4 5	不足		
英語	自己採点	点				



■グループシート

「模試までの〇〇日作戦」グループメンバー＆進捗表

氏名					氏名				
氏名					氏名				
				5					10
				15					20
				25					30
				35					40



次ページでは、
3人の先生方の
検討の様子を
ダイジェストで紹介！

模試の過去問題を解いた後、最低1日10分、毎日確実に継続できる学習内容を教科ごとに決め、優先順位をつけさせる。その後、グループをつくり、毎日のHRの時間などに、自分が決めた学習に取り組んだかどうかを確認し合う。そして、グループシートのマスに取り組んだ人数分の○を書き込む。グループで日々の進捗を共有すること、
「みんなと一緒に頑張る」といった気持ち醸成させるとともに、ほかの生徒が取り組んでいる学習内容に興味を持たせるのがねらいだ。3教科の10分学習すべてに取り組んだら○を1つ書く、あるいは取り組んだ教科の数だけ○を書くなどのルールは、クラスの状態に応じて決めていくこととした。

最優先課題を明確にして
グループで支え合う



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<http://berd.benesse.jp>) からダウンロードできます。「HOME→教育情報→高校向け→生徒指導・進路指導ツール集」でご覧ください。

2年生 1学期 模試への意識づけシート



活用の流れ

- 1 過去問題を解いた結果を基に、個人シートに最低限の学習内容を記入
- 2 グループシートで学習の積み重ねを毎日記録する
- 3 グループシートを教室内に掲示し取り組み状況を競い合う

生徒の多忙さを認め、
スモールステップを設定させる

部活動や学校行事の中心となる2年生は、どうしても学習に充てる時間が少なくなり、そもそも日々の授業の予習・復習で精いっぱいである。従って、自分の弱点が分かっても、その対策に着手する余裕がない。だからこそ、1日10分程度の短時間でできる範囲で、「ここだけは」という優先的に取り組むべき内容を明確にすることが重要であるということを確認した。また、模試の対策は個別指導になりがちだが、担任もその時間がなかなか取れていない現状を踏まえると、生徒一人ひとりが自ら課題を見つけ、集団の力で学習に

取り組むような工夫をするとういのではないかという仮説に到達した。

そこで、これまでのシートを「個人シート」と位置づけ、最低限これだけという学習内容を自己決定し、取り組むべきスモールステップを宣言する場とした。さらに、生徒同士で学習への取り組みを励まし合う「グループシート」を運用し、それを教室内に掲示するなどして、学習実績をグループ間で競い合う形とした。

なお、グループシートにメンバー個々の学習内容を記入するかどうかについては、「ほかの人の学習内容を知ることにも勉強になる」「自分の学習内容を知られたくない生徒もいる」という意見に分かれた。

検討メンバーの先生に、自身の指導観や自校の生徒特性を踏まえて、ツールの活用方法や留意点などをお話いただきました

個々の積み重ねを肯定し合える雰囲気を作りたい

千葉県・私立成田高校 佐藤杏奈 さとう・あんな



本校では、1年生で初めて受験する模試以降、「模試は自分の可能性を知るためのものだから、できる限りの準備をして臨もう」と繰り返して生徒に話します。意識づけシートも、生徒に無理なく学習計画を立てさせようと改良を重ねてきましたが、生徒間の意識の持ち方や取り組みの差はなかなか解消できていませんでした。今回、他校の先生方との話し合いの中で、教師が引っ張るのではなく、生徒に委ねてみるというグループワークへの発想の転換ができました。確かに、生徒同士での対話を通じて、それぞれが学習への意識を高めていくのは、教師にとっても負担が少なく、現実的です。

自らスモールステップを設定して臨む、各教科1日10分間の学習は、学習習慣が確立していない生徒にも取り組みやすいものでしょう。クラスの中に、できることをこつこつと積み重ね、肯定し合う雰囲気が生まれてきたら、普段から真面目に取り組んできた生徒、手がからないけれど目立たない生徒も救われると思います。

佐藤先生プロフィール 教職歴3年。同校に赴任して3年目。進路指導部所属。理科。「すべての行動に、意味と考えを持たせたい」
学校プロフィール 全日制／普通科／共学／1学年約330人／2017年度入試合格実績（現役のみ）／国公立大は、東北大、筑波大、東京医科歯科大、一橋大、大阪大などに30人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、早稲田大などに延べ447人が合格。

取り組みを形骸化させない教師のかかわりが重要

長野県屋代高校・附属中学校 宇都宮 仁 うつのみや・じん



2年生のうちに主体的な学習習慣が確立でき、休み時間などの隙間時間をうまく使えるようになった生徒は、3年生での受験モードへの切り替えがスムーズです。ただ、主体的な学習習慣の確立は、1・2年生の段階から「学習計画の立案→実行→検証・修正」のサイクルを模試だけでなく定期考査も含めて繰り返していかないと、身につくいきものです。今回の意識づけシートは、1年を通して継続的に使うことで、より大きな効果を生徒に与えてくれるはずです。

活動そのものは生徒が主体的に進めていくべきですが、教師は取り組みが形骸化しないように見守る必要があります。10分間の学習の内容が伴っていないのに「まあ、いいか」と許すような甘えが生徒に生まれないように、教師から刺激を与えることが重要です。私なら、試験前に予想問題と解答作りをグループで挑戦させてみるかもしれません。そういう意味では、生徒に任せっきりにせず、グループ分けも、学力別や優先教科別など工夫したいですね。

宇都宮先生プロフィール 教職歴28年。同校に赴任して7年目。キャリア教育係主任。国語科。「生徒の『直観』と『情熱』を育てていきたい」
学校プロフィール 全日制／普通科・理数科／共学／1学年約280人／2017年度入試合格実績（現役のみ）／国公立大は、北海道大、東京工業大、名古屋大、京都大などに114人が合格。私立大は、中央大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ279人が合格。

学習における集団づくりの価値を広く共有したい

高知県・私立土佐塾中学・高校 藤澤佑介 ふじさわ・ゆうすけ



模試を活用した本校の指導は、教師と生徒が1対1で向き合っているのが定石です。しかし、担任がすべての生徒を見ていくのは容易ではありません。集団の力を生かすという発想は、その課題において有効かもしれないと思いました。学校行事の中心になる2年生にとっては、力を合わせて行事に取り組める集団づくりにもつながりますし、3年生になる前に「受験は団体戦」であることを意識させる土壌づくりにもなるでしょう。グループでそれぞれが取り組んだ学習内容を共有することで、学習の仕方を学べるのもよいですね。模試だけでなく、定期考査でも試してみたいです。ただし、グループ活動が苦手な生徒もいるでしょうから、個別面談で学習状況をチェックすることも継続していくべきでしょう。

集団を意識することで生徒の成長につながるという大きなストーリーは、ぜひ学年団で共有したいと思っています。そして、そのストーリーは教師だけのものにとどめず、生徒や保護者にも伝えていきたいですね。

藤澤先生プロフィール 教職歴12年。同校に赴任して12年目。英語科教科部長。「教師が伸びれば生徒も伸びる。チャレンジする姿勢を忘れない」
学校プロフィール 全日制／普通科／共学／1学年約200人／2017年度入試合格実績（現役のみ）／国公立大は、東北大、名古屋大、京都大、神戸大などに61人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ349人が合格。

改良したいのに、どうすべきか分からない……

指導ツールを募集しています！

「改良！ 指導ツール ビフォーアフター」では、取材にご協力いただける先生及び取材を検討させていただく「指導ツール」を募集しています。「自校で長年使っているツールを見直したい」「ツールのより効果的な活用法を検討したい」といった、課題意識をお持ちの先生方のご応募をお待ちしております。

〈個人情報の取り扱いについて〉をご確認いただき、必要事項①～④をご入力の上、指導ツールを添付して下記のe-mailアドレスにご送信ください。

※送信前に一度、生徒様の情報が削除されているかご確認をお願いいたします

- ①学校名・お名前
- ②分掌・ご教職歴
- ③ツールの内容（目的・活用時期・活用方法）
- ④ツールに対する課題意識、改善要望

view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

〈個人情報の取り扱いについて〉 この「改良！ 指導ツール ビフォーアフター」のツール募集でご提供いただく個人情報は、今後の企画を検討する目的で利用いたします。お客様の意思によりご提供いただけない部分がある場合、手続き・サービス等に支障が生じることがあります。また、商品発送等で個人情報の取り扱いを業務委託しますが、厳重に委託先を管理・指導します。個人情報に関するお問い合わせは、個人情報お問い合わせ窓口（0120-924721、通話料無料、年末年始を除く、9時～21時）にて承ります。（株）ベネッセコーポレーション CPO（個人情報保護最高責任者）
上記をご承諾くださる方はご送信ください。

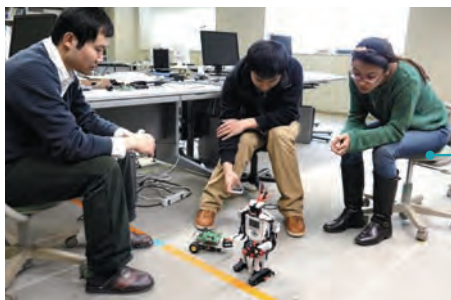


技術力に加え、異文化適応力や 創業の精神を備えた人材を育成する

会津大学 コンピュータ理工学部

留学先での研究内容は すべて自分で計画します

回路系の先端技術に触れたいと考え、中期留学でアメリカに行きました。学ぶ時は集中し、休日は思い切り遊ぶ現地学生の姿を見て、好奇心や遊び心も研究の土台になると感じました。(土佐さん)



起業に必要な知識を学び、 ものづくりを体験できます

「ベンチャー体験工房」の授業では、AI（人工知能）について研究中です。先生との距離が近く、すぐに相談などもでき、実用化するために必要なアドバイスをもらえます。(鄒さん)



インターンシップで 最先端のIT技術を学びます

シリコンバレーでのインターンシップでは、現地の学生との議論に参加したり、工学を学ぶ人なら誰もが憧れる有名企業を訪問したりして、研究への意欲が高まりました。(鄒さん)



日本初のコンピュータ理工学専門の大学として開学した会津大学では、「三位一体」すなわち「心」（創業・挑戦の精神）、「技」（高度なICT技術）、「体」（異文化への適応力）を兼ね備えた人材の育成を目指している。技術力に加え、「心」や「体」を重視するのは、これからの社会において、自らのアイデンティティと志を持ち、異なる国籍や文化を持つ人たちとともに、新たなサービスや技術を創出していく力が求められるという考えからだ。

1年次から、創業・挑戦の精神を鍛えるための専門科目を多数用意し

1年次から教員や上級生とともに問題解決型学習に挑戦



コンピュータ理工学部
コンピュータ理工学科4年
土佐 峻平
とさ・しゅんぺい
栃木県立宇都宮白楊高校卒業。大学院で回路系の研究を続ける予定。



コンピュータ理工学部
コンピュータ理工学科4年
鄒 昌宏
ぞう・ちゃんほん
中国南寧市第三中学校卒業。中国大連の東軟情報学院から、会津大学に編入。

ている。例えば、教員や上級生とともに研究室で学べる「課外プロジェクト」もその1つだ。学生が興味のある研究テーマを選択して問題解決型学習を行う。講義で学んだ知識を活用し、自主的に研究を進める能力を醸成することをねらいとしている。2018年度は、「人工知能を搭載したラジコンの開発」など29のテーマが設定された。土佐峻平さんは、次のように語る。

「ものづくりの現場に触れられ、身の回りにある技術がどのような仕組みで動いているのかを学ぶことができました。興味のある回路系の技術を学ぶために、どの専門科目を履修すべきかも見えてきました」

大学での研究が 起業につながる学生も

2年次から履修できる「ベンチャー基本コース各論Ⅰ・Ⅱ」では、各分野で活躍している外部講師による講義を受け、ビジネスに関連した知識を系統的に学ぶことができる。

また、実際にその知識を使って実践する「ベンチャー体験工房」の授業では、学生が興味のあるテーマを選択し、地元の企業や自治体と連携

しながら、新製品・新サービス開発につながる研究を行う。

郷昌宏^{ごうちひろ}さんは、AIの1分野であるディープラーニング(*)について学んでいるという。

「ウェブサイトでユーザーの関心に合った記事を表示するためのAI技術を研究中です。工房内では、同じ分野で研究する仲間と議論しながら研究を深めていくことができ、ベンチャー企業の疑似体験ができます」

「ベンチャー体験工房」での研究テーマが卒業研究や就職、起業に結びついている学生もあり、現在までに23社のベンチャー企業が会津大学から誕生している。

自由度の高い海外留学で さらに専門性を深める

異文化への適応力を身につけられるよう、徹底した英語教育も行っている。約4割の教員が外国人のため、専門科目の半数は、英語で授業が進められ、卒業論文は英語で提出することが義務づけられている。また、1年次から海外留学を促進し、留学先でも学生が主体的に学べるよう工夫されている。

土佐さんは、大学の海外短期留学制度を利用し、1年次の春休みに3週間、アメリカのローズハルマン工科大学で学んだ。そこで英語力の不足を実感し、帰国後は英語の学習にも力を入れたという。そして、3年次には中期留学に挑戦した。

「短期留学では聴講のみだったため、次は授業に参加して本格的に学びたいと思いました。中期留学では、自分で履修プランを立て、回路系の専門科目を現地の学生と一緒に学びました。毎日膨大な量の課題が出され、深夜まで勉強する日々でしたが、最新技術を学ぶことができ、大きな刺激を受けました」(土佐さん)

郷さんは、3年次の夏休みにアメリカのシリコンバレーで行われたインターンシップに参加し、現地で起業を目指しているエンジニアと同じ空間で、ものづくりに挑戦した。

「決められた研修内容はなく、私は現地のエンジニアにアドバイスを受けながらロボットを作りました。最も興味があるAIについても活発な議論ができ、卒業研究のヒントも得られました。大学院でも研究を続け、世界で活躍できるコンピュータ・エンジニアを目指します」(郷さん)

大学の思い

学生の自主性を伸ばす カリキュラムを構築



コンピュータ理工学部
学部長
宮崎敏明
みやざき・としあき

本学では、学生が自主的に学び、好奇心や個性を伸ばせるようカリキュラムを構築しています。我々が学びの道筋を押しつけるのではなく、学生自身が学びの目的を見つけることが、学びを深めていくために何よりも重要だと考えているからです。

「課外プロジェクト」や「ベンチャー体験工房」などの授業以外にも、留学経験や留学生との触れ合いから、自分が社会で何をすべきか考えるきっかけを得ているようです。本学の留学生の多くは、母国のICT技術の発展に貢献したいという高い志を持って入学しています。日本人学生が、より留学生から刺激を受けられるよう、留学生の定員数を増やし、学内のラウンジでは学生同士が英語で談笑できるような環境を整えていきたいと考えています。

授業や海外留学で高い技術力を身につけ、研究を深めていく中で、起業したいと考える学生が出て来た場合に、技術的な指導や資金等の支援を行う制度も整備中です。今後も、学生の限らない可能性を伸ばすカリキュラムを考えていきたいと思っています。

* 音声の認識、画像の特定など、人間が自然に行う作業をコンピューターに学習させる機械学習手法の1つ。



サポーター企業と連携し、 理論と実践を融合しながら学ぶ

関東学院大学 経営学部



自分のアイデアを形にする 苦労と面白さを実感しました

ゼミの仲間と学内のビジネスプランコンペティションに参加し、地産物を販売する企画を提案。その後、企業の協力を得て、「K-bizマルシェ」として実現しました。(荻原さん)

商品の仕入れから販売まで 自分たちで行いました

「K-bizマルシェ」で扱う商品は、自分たちで三浦半島を歩いて探し、仕入れ交渉を行って販売しました。当日は、たくさんのお客様が来店され、新聞やテレビなどメディアからの取材も受けました。(荻原さん)



失敗から得ることが多く 社会で必要な力を学べます

企業に提案する企画書は、まずゼミの先輩に見てもらい、先生からも助言をもらいます。毎日遅くまで、企画案を練り直しましたが、実社会でもこうした粘り強さが必要だと学びました。(吉田さん)



新規ビジネス立案を 1年次から体験

関東学院大学は、2017年4月、経済学部経営学科を発展的に独立させ、経営学部を開設した。その教育の柱となるのが、「K-biz」というプラットフォームを利用した学びだ。学生は、大手企業、地元の優良企業などからなるサポーター企業10社と連携して様々なプロジェクトに取り組み、企画力や提案力、実践力など社会で求められる力を身につけていく。母体となった経済学部経営学科では、いくつかのプロジェクトを先行的に実施してきた。

1年次は、その準備として、まずビジネスプランを作ってみることに



経済学部
経営学科4年
荻原未来
おぎわら・みき
神奈川県立新城高校卒業。マスコミ系企業に就職予定。



経済学部
経営学科3年
吉田一則
よしだ・かずのり
福島県立磐城桜が丘高校卒業。小山先生の授業に感銘を受け、同ゼミに所属。



経営学部
経営学科1年
生田瑠里奈
いくた・るりな
千葉県・私立暁星国際高校卒業。マーケティングの勉強に興味があり入学。

ら始める。前期の必修科目「ビジネスプランⅠ」では、新規事業の企画書の作成方法を学ぶ。後期の「ビジネスプランⅡ」では、少人数のグループで新規ビジネスプランを立案し、プレゼンテーションを行う。1年生の生田瑠里奈さんは、仲間と協働して企画を立てる難しさを実感したという。

「私たちのグループは、『学生証を電子化するサービス』を企画しましたが、最初はメンバーと打ち解けられず、企画もまとまりませんでした。そこで、まずはお互いの得意分野を確認し合い、役割分担をして企画立案を進めていくようにしました」

学生が提案した企画をプロジェクト化して実現

2年次後半からは、ゼミに所属し、企業と連携したプロジェクトを進めていく。小山ゼミに所属している4年生の荻原未来さんは、新鮮な地産物を駅前で販売する企画を学内のビジネスプランコンペティションで提案。その後、地元企業2社の協力を仰ぎ、実現にこぎつけた。

「企業担当者への最初のプレゼンテーションでは、企画書を人数分用

意していなかったり、内容も利益について触れられていなかったりと、恥ずかしい失敗ばかりでした。ただ、企画には興味を持っていただき、何度か打ち合わせを重ねてマルシェの開催を実現しました」（荻原さん）

荻原さんたちは、三浦半島を実際に歩き回り、野菜やジャム、ドレッシングなどの加工品、海産物を仕入れ、当日の販売までを担当した。開催後は収支分析を行い、反省を踏まえて次の開催に備えた。

実践的な取り組みから必要な学びや進路を見いだす

16年度から始めた「マルシェ」は、17年12月に4回目を開催した。ゼミの先輩から活動を引き継いだ3年生の吉田一則さんは、マルシェをさらに盛り上げていくにはどうすべきか悩んだという。そこで、新たに取入れたのが、購入者に配布する地産物の魅力を伝えるチラシに広告を入れるという施策だ。

「マルシェ自体の収支は黒字でしたが、チラシの費用も入れると赤字でした。そこで、広告を入れることを思い決めました。今回のマルシェは、『つなぐ』をテーマにしていた

こう、土産品を販売するオリーブ洋菓子店や飲食店に交渉し、広告を出していただきました」（吉田さん）

企画立案、商品仕入れ、販売、収支分析といった実際のビジネスを一通り経験して、自分に足りない力に気づいたと吉田さんは話す。

「協力企業の方に新しく取り扱う商品を提案する場で、商品のよさをうまく伝えられませんでした。それを察した仲間が、商品探しの苦労や商品の魅力を具体的な話で伝え、フォローしてくれました。自分に足りないスキルが明確に分かり、普段から人に伝わる話し方を心がけるようになりました」

荻原さんも4回のマルシェ開催を通して得た気づきから、卒業研究のテーマを見つけたという。

「マルシェの前を通りかかる方に、ただ商品を販売するだけでは駄目だと気づき、ターゲットを明確に設定した効果的な販促方法について考えるようになりました。この経験を通して消費者行動に興味を持ち、『消費者行動における口コミ』をテーマに卒業論文を書きました。卒業後は、営業職として働く予定です。ゼミでの学びを生かしていきたいです」

大学の思い

生のビジネス経験が学生の真の学びを促す



副学長
経営学部教授
小山 巖也
こやま・よしなり

経営学部では、企業と連携した実践的な学びを通して、学生が社会で求められるスキルや自らに足りない知識・技能を感じ取り、主体的に学んでほしいと考えています。

経営学部の社会連携の大きな特徴は、サポーター企業10社とのネットワークを構築し、深く柔軟な連携を実施していることです。例えば、企業2社と本学のあるゼミが連携し、障がい者スポーツ支援に関するプロジェクトを実施しています。また、地元の高校2校と連携し、企業が設定した課題に取り組む高校生を本学の学生がサポートしています。大学が中心となり、地域・企業が有機的につながることは、学生だけでなく、企業や我々教職員にとってもの学びにもなると感じています。

18年度は、「K&N」の学びをさらに推進し、1年次から企業と連携したプロジェクトに参加できる「K&N」アクティブチャレンジ」を導入予定です。こうした取り組みで学生の企画力や発想力を伸ばし、学生発案のプロジェクトがますます増えることを期待しています。

これからの会議・研修のあり方、つくり方

今、学校現場では、次期学習指導要領等に向けて、教師にも、「アクティブ・ラーニング」の視点に基づいた教師同士の日常的な学び合いが求められている。職員会議や教員研修などで、教師集団が知見を結集し、学校をチーム化させる具体策を、現場の声や実践事例を交えて紹介する。

監修 山口 寛

行政、教育機関、地域、企業など、様々な場で対話を促進し、構成員が主体的に課題に取り組む集団づくりを支援するファシリテーターとして活躍。津屋崎ランチ LLP 代表 / LOCAL&DESIGN (株) 代表取締役。



会議・研修の司会・進行役の先生方の質問に答えます！

カリキュラム・マネジメントを通じた学校改革の第一歩は、「育成を目指す資質・能力」と、その教育目標達成のために求められる「これからの指導のあり方」を教師全員で共有し、共通理解を図ることです。その状態を実現するために有効なのが、教師同士の語り合いです。そこで、本コーナーでは経験や年齢にとらわれず、自由に意見を述べ合い、よりよい学校の姿を追究する会議・研修のあり方、つくり方を考えてきました。読者の先生方からは、「学校が必要としている視点だ」と大きな支持をいただく一方で、

「自校の会議・研修に生かしてみましたが、なかなかうまくいかない」といった声もいただいています。そこで、今号から2号にわたり、本コーナーに多く寄せられたこれからの会議・研修をつくっていく上での疑問や悩みについて、答えていきます。初回の今号では、これからの会議・研修づくりの第一歩と言える「自由な対話のための心得」として、2017年6月号の本コーナーP.45で紹介した「断定・否定をしないで!」「ひらめきと沈黙を歓迎しよう!」「時間は全員のもの!」についての疑問・悩みを取り上げます。



会議・研修づくりに取り組んだ現場の先生方からの質問



質問者 1

これからの学校のあり方について話した際、「自分と違う意見を頭ごなしに否定しないで」と参加者をお願いしましたが、若手の斬新な意見を「それは違うよ」と否定する教師がいます。進行役の私は、**ほかの参加者の意見を否定する人に対して、どのように振る舞えばよいのでしょうか？**



質問者 2

新任教師や本校に異動してきたばかりの方の意見を聞いていると、司会・進行役でありながら「その考えは本校にはあてはまらないなあ」と心の中で否定している自分に気づきます。否定・断定しないことの大切さは理解できるのですが……。心の中で**断定・否定するのは仕方ないのでしょうか？**



質問者 3

進行役の私自身、会議でみんなが沈黙していると、つい「例えば、こういうことですか?」と例を挙げたり、「〇〇さんはどうですか?」と指名して発言を促したりしてしまいます。恐らく5秒も沈黙に耐えられていない気がします。**何秒くらい沈黙を我慢すればよいのでしょうか？**



質問者 4

会議では「発言は1人1分以内で」「できるだけ手短かに」などをお願いしていますが、ほとんどの先生は時間を気にしてくれません。仲間内の会議だからそんなに時間に神経質にならなくてもいいだろうという雰囲気を感じます。**どうすれば時間を意識してくれるのでしょうか？**



様々な考えを持った人たちが集うからこそ、会議・研修には多くの学びがあるのと同時に、想定外の出来事も起こります。司会・進行役に求められる振る舞いについて解説します。

Q1 ほかの参加者の意見を頭ごなしに否定する人への対応は？

A どのような意見も議論の材料として全体に還元する

参加者がほかの参加者の意見を頭ごなしに否定したり、一方的に自説を語り始めたりした時、司会・進行役はそうした発言を制止するのではなく、「みなさんはこの意見をどう思いますか？」と参加者全員に問いかけてみてはどうでしょうか。例えば、「A 先生はこう考えています」「一方、B 先生はこう考えています」と整理し、「これについて少しペア（グループ）で話してみてください」と全体の共有物として、少数で議論を続けます。そうして常に全体に「みなさんはどう思いますか？」と問いかけ続けることで、「どのような意見も、それが唯一のものではない」といった心構えを参加者に醸成することができるはずです。

Q3 沈黙に耐えきれない！ 沈黙はどれくらい我慢すればよいのか？

A 心の中で 10 秒数え、参加者の「一步」を待つ

発言を促しても誰も手を挙げてくれない時、司会・進行役には、焦って自分が意見を言う前に、心の中でゆっくりと 10 秒数えていただきたいと思います。10 秒は、発言しようかどうか迷っている参加者が一歩を踏み出すことを待ってあげる時間です。10 秒待っても手が挙がらなければ、指名することなく、意見なしとして会を進行し、また次の機会に発言を促し、10 秒間待ちます。何度待っても誰も発言しないことがあるかもしれません。しかし、それを我慢して続けることで、参加者は自分から手を挙げなければという参加意識が芽生え、参加者一人ひとりが当事者意識を持てるように変化していけるでしょう。

Q2 自分とは違う意見を心の中で否定してしまう自分への向き合い方は？

A 「なぜ？」「どうして？」を自分に問いかける

自分とは異なる意見を聞いた時、誠実に相手の言葉に耳を傾けながらも「この意見は間違っている」と心の中で否定することは、私は自然なことだと思います。心の中では否定していても、反射的に否定の言葉を口にしなければそれでよいのではないのでしょうか。ただ、対話をより大切にするために、相手の意見を聞きながら「なぜ、私はこの意見を受け入れることができないのか」「なぜ、私は自分の意見に固執するのだろうか」と自分に問いかけていただきたいと思います。他者にではなく、自分に「なぜ？」と問いかけ、自分の思考をひも解く習慣を身につけることで、自分の知らない世界が見えてきます。

Q4 時間を独り占めして長々と発言する参加者への対応は？

A 呼び鈴などを使って、制限時間を明確に示す

ホワイトボードなどに「発言は 1 回 1 分以内」と書いた紙を貼るなどして、司会・進行役が時間を計り、呼び鈴などで知らせます。グループでの話し合いの場合は、タイムキーパーを決めるとよいでしょう。時間に対するルーズさは、集団において癖になりやすいものです。例えば、定期的な会議を、全員がそろってから始めるようにすると、「この会議は遅刻 OK」と参加者が理解してしまい、それ以降も定刻通りに参加者がそろいにくくなります。発言も同様で、話が途中であっても司会・進行役が「1 分過ぎました」と勇気を持って告知することで、「この会議では発言時間を守らなくては」と全員が了解してくれるはずです。

貴校の会議・研修づくりをお手伝いいたします！

VIEW21 編集部が本コーナーの監修者とともに、貴校の会議・研修づくりをお手伝いいたします（会議・研修の様子は、本誌誌面で紹介させていただく場合があります）。現状の会議・研修のあり方に課題意識をお持ちの先生方のご応募をお待ちしております。

〈個人情報の取り扱いについて〉をご確認いただき、必要事項①～④をご入力の上、下記の e-mail アドレスにご送信ください。

※送信前に一度、生徒様の情報が削除されているかご確認をお願いいたします

① 学校名・お名前 ② 分掌・ご教職歴 ③ 改善したい会議・研修の内容（目的・時期） ④ 会議・研修に対する課題意識、改善要望

✉ view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

※ご応募いただいた学校すべてを必ずお手伝いできるわけではありません。

〈個人情報の取り扱いについて〉 この「これからの会議・研修のあり方、つくり方」の会議・研修づくりの募集にご提供いただく個人情報は、今後の企画を検討する目的で利用いたします。お客様の意思によりご提供いただけない部分がある場合、手続き・サービス等に支障が生じることがあります。また、商品発送等で個人情報の取り扱いを業務委託しますが、厳重に委託先を管理・指導します。個人情報に関するお問い合わせは、個人情報お問い合わせ窓口（0120-924721、通話料無料、年末年始を除く、9 時～21 時）にて承ります。（株）ベネッセコーポレーション CPO（個人情報保護最高責任者）上記をご承諾くださる方はご送信ください。

福岡県立学校「新たな学びプロジェクト」

体験中心の発表会や研修で、 新たな学びの裾野を広げる

福岡県は、2015年度に独立行政法人教員研修センター（現：教職員支援機構）より「新たな学びに関する教員の資質能力向上のためのプロジェクト」の推進地域の委嘱を受け、アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善の研究を進めている。

「志は高く、ハードルは低く」を合いことばに、県立高校7校・県立中等教育学校1校の実践内容を全県に広げることが目的だ。事業を主導する福岡県教育委員会と福岡県教育センターに実践内容とその成果を聞くとともに、2017年12月に行われた実践発表会の模様をレポートする。

事業概要

**今後の教育の方向性を見据え、
全県で授業改善を図る**

独立行政法人教員研修センター（現教職員支援機構）が行う「新たな学びに関する教員の資質能力向上のためのプロジェクト」は、子どもの主体的・協働的な学びや、その実現のための指導法などを充実させるとともに、教師の指導力向上を図る研修プログラムの構築を目指す事業だ。期間は2015年度から3年間で、現在は11の自治体が研究委嘱を受けている。その1つである福岡県は、県立高校7校と県立中等教育学校1校が、福岡県教育センター（以下、教育センター）や大学と連携しながら研究を進めている（図1）。研究委嘱により同機構に派遣されていた福岡県教育庁教育振興部高校教育課の鬼塚晋吾指導主事は、同プロジェクトにエントリーした理由を次のように語る。

「当時はアクティブ・ラーニング（以下、AL）という言葉が開始されたばかりで、私たち指導主事もそれがどういった学びなのか深く理解していませんでした。しかし、今後そうした方向に教育が進むのであれば、今

から着手すべきであり、その研究を機に、各校の授業改善を活性化させたいと考えました」

研究開発校は、学科の種類や卒業後の進路、地域のバランスを見ながら決定。各校が連携する大学は、それぞれの課題や研究内容に応じて検討した。例えば、ICTの活用をテーマにした高校には情報技術系の大学教員を、生徒指導が課題だった高校には教育心理学の大学教員を、ビジネス系学科がある高校には経営学の大学教員を連携先として打診した。

「授業改善というと教育学部の研究者が連携先に挙がりやすいですが、生徒に身につけさせたい資質・能力を育むという点を最優先に考え、連



福岡県教育センター 教育振興部
高校教育課 指導主事
鬼塚 晋吾 おにづか しんご
（独）教職員支援機構派遣を経て、
2017年度から現職。



福岡県教育センター 教育指導部
教科教育班 主任指導主事
瓜生 純子 うりう・じゅんこ
福岡県立高校主幹教諭を経て、
2015年度から現職。



福岡県教育センター 教育指導部
教科教育班 主任指導主事
高野 朝幸 たかの・ともゆき
福岡県立高校教頭を経て、2017
年度から現職。

*プロフィールは2018年3月時点のものです



写真1 2月に行われたチーム会議では、授業改善の到達度を測るルーブリックの作成に向け、3つの班に分かれて話し合った。KJ法などを活用して評価の要素を整理し、まとめた内容を班ごとに発表した。

特命プロジェクトチームのメンバー



福岡県教育センターでは、事業内容によって、部班を超えたチームを結成し、事業を進めている。メンバーの担当教科や職務が異なることが、チームに多様な気づきをもたらし、現場支援の充実に結びついている。

携先を探しました」（鬼塚指導主事）

推進体制

部班を超えたメンバーの知識と経験を生かして支援

プロジェクトの企画運営は福岡県教育委員会が担当し、現場への支援は教育センターが立ち上げた特命プロジェクトチームが行う。チームのメンバーは12～14人（年度により変動）で、部や班を超えて任命された指導

主事で構成されている。教育センター教育指導部の瓜生純子主任指導主事は、部班を超えたメンバーでチームを組むことの強みを次のように語る。「メンバーは、各自が担当する教科や研修等における通常業務を行いつつ、本プロジェクトも推進します。現場の悩みや初任者が抱く疑問など、通常業務で吸い上げた様々な課題をチーム内で共有し、それを踏まえて実行計画を立てることで、効果的に学校を支援できました」

また、メンバーに特別支援学校や中学校を担当する指導主事がいたことで、チーム全体の視野が広がった。例えば、特別支援教育の観点で考え、ユニバーサル・デザインの視点で授業改善を行った学校もあるという。さらに、週1回のチーム会議を主体的・対話的で協働的な場としたことも特徴的だ（写真1）。例えば、各自が関心を持った外部研修に参加し、そこで得た成果をホワイトボードや付箋を使ったグループワークで共有するといったことを行っている。

大学と連携した研究実践

専門の研究者からの価値づけが現場の自信につながる

研究開発校の研究実践は、各校が自校の教育目標や課題に応じて進め、状況に応じて特命プロジェクトチームが支援を行う。また、すべての研究開発校と連携先の大学、教育センター、県教育委員会が集まる研究推進協議会を年3回行い、各校の実践や教育動向などを共有した。

大学との連携は、取り組みを進める上で大きな力となった。研究開発校の1つである田川高校の教頭だった

図1 福岡県立学校「新たな学びプロジェクト」研究開発校

研究開発校	2017年度の研究開発テーマ	連携大学
福岡県立北筑高校	論理的に説明する力を育む授業改善の研究	福岡教育大学
福岡県立折尾高校	評価法を基軸とした新しいAL型授業の開発とALの地域普及について	北九州市立大学
福岡県立福岡高校	ICTを活用したバラエティーあふれる福岡高校オリジナルのアクティブ・ラーニングの開発	九州大学
福岡県立糸島高校	ICTを活用した21世紀型授業を取り入れた授業力向上の取組	九州大学
福岡県立朝倉光陽高校	生活指導と基礎学力の定着を一体とする授業改善の研究	福岡教育大学
福岡県立田川高校	主体的な学びの土台を作る田川アクティブ・ラーニング	九州工業大学
福岡県立光陵高校*1	能動的学習による基礎的・基本的学力定着のための授業改善	福岡教育大学
福岡県立輝翔館中等教育学校*1	ICTを利用して生徒の知識の活用力を高めるアクティブ・ラーニング	久留米大学

*1 光陵高校と輝翔館中等教育学校は2016年度から研究開発校。

* 福岡県教育センター提供資料を基に編集部で作成

高野朝幸主任指導主事は、こう語る。

「連携先の大学教員がALの素材として挙げた中に、小テストがありました。慣れ親しんだ素材も活用できると知り、ALへのハードルが一気に下がりました。また、授業で褒めていただくことも多く、専門家から自分たちの指導を価値づけられたことで、自信ができました」

大学教員ならではのと言える、大学入学後や就職後のキャリアを見据えたアドバイスも、授業改善の必要性を見いだすことにつながったという。

「大学では、ALの視点を取り入れた授業が増えており、円形テーブルやホワイトボードなどを備えた教室が整備されていると聞き、そうした環境に生徒が置かれることを考えると、高校でも授業の転換が必要だと感じました。また、学生の就職活動を支援する大学教員は、社会で必要とされる資質・能力を肌で感じています。そのような視点での助言は説得力がありました」(高野主任指導主事)

そうした大学と高校の連携が実現したのは、研究推進協議会などで繰り返し伝えてきたプロジェクトの目標が大学側にも浸透したからではないかと、瓜生主任指導主事は考えている。

実践内容の共有

参加者がすぐ授業に取り入れられるよう、発表会を体験型にする

事業の目標の1つとして、18年度までに全県立学校にALの視点からの授業改善を広めることを掲げ、研究開発校の実践内容の普及にも力を入れた。各研究開発校が自校での公開授業を年2回、全研究開発校が集まる実践発表会を年1回開いている。公開授業の案内は、全県立学校のほかに、近隣の中学校にも行う。

「大勢の先生に来ていただくことで、多様な視点から意見を聞くことができ、また、注目されることで、授業改善への意欲もさらに高まります。学校を外に開き、一緒に学ぶことで、学校が活性化するといった相乗効果がありました」(高野主任指導主事)

実践発表会には、全県立高校・中等教育学校から各2人が参加し、発表会を通じて自身の学び・気づきを自校の教師に共有する役割を担う。研究開発校の分科会では、参加者が模擬授業を受けるなどの体験型にしている。さらに、全体会では、分科会での学びや気づきなどを基に、自身の授業改善について発表し合うグ

研究開発校の実践例

■福岡県立福岡高校 [国語]

授業の流れの工夫 個人→協働→個人という順で活動し、個人の思考の深化・統合を促す。

【例】①前時の復習/教師の発問をペアで確認 ②個人ワーク(5分程度) ③グループで読解(15分程度) ④個人ワーク(5分程度)/再度、個人で解答をまとめる。

ホワイトボードの活用 グループワークでは、小型のホワイトボードに言葉・図・絵をかきながら共有させる。思考の視覚化は考えの整理に有効で、手を動かすうちに、生徒自身が相手に伝わりやすい表現方法を考え出していく。また、生徒の理解が不十分な点が見える化されるので、教師も指導のポイントをつかみやすい。

書画カメラの活用 生徒の解答を書画カメラで映し、解答を確認し合ったり、足りない要素を指摘し合ったりする。拡大表示されるので見やすく、生徒は教師の話を集中して聞く。

■福岡県立朝倉光陽高校 [日本史]

発問・活動の工夫 時代の異なる3つの歴史的事象を取り上げ、班ごとにその事象の具体的な内容を調べて発表し、ほかの班の発表も聞いた上で、3つの事象の共通点を探す。目標は、歴史的展開における歴史的事象の意味や意義を解釈できるようになること。単元の終わりや時代の区切りなどに、考えさせる場として行う。

【例】「大化の改新」「建武の新政」「明治維新」について、班内で分担して、教科書や資料集などから各事象の情報を収集し、1枚のシートにまとめる。知り得た内容を班で共有し、発表に向けて練習する。3時間目に班ごとに発表し、共通点を探して、個人でワークシートにまとめる。

学年集会の進め方の工夫 生徒指導が重要な場面で、教師が話すだけでなく、グループで「なぜ、そうするのか」「なぜ、よいのか、駄目なのか」を話し合わせ、生徒自身に考えさせ、気づきを促す。

グループワークを行う(図2)。

そのような体験型の研修とすることで、参加者にとっては、その実践のよさを体感的に理解でき、自分の指導に置き換えやすくなる。参加者から、「今まで受けた研修の中で一番楽しく、身になった」という声もあつたほだ。一方、発表者にとっては、参加者の反応が直接伝わり、改善点をつかみやすいという利点があった。

「皆で実践を持ち寄ること、多様な指導法を知り、その中から自分に合った方法を見つけられることが、よかったと思います」(鬼塚指導主事)

全県に広める工夫

体験中心の研修でALへのハードルを低くする

特命プロジェクトチームでは、学校全体が変わるためには、すべての教師が授業改善に向けた一歩を踏み出すことが大切だと考え、ALの視点からの授業改善を普及するための研修を開発・実施した。

最も大切にしたのは、授業にALの視点を取り入れる理由を理解してもらうことだ。メンバーが中央教育審議会の答申や関連の書籍を読み込

図2 「新たな学びプロジェクト」実践発表会 (2017年12月開催)

実践発表会には、県外の高校3校も含めた109校から170人あまりが参加。2015年度の1回目から活動的要素を取り入れ、参加者がただ話を聞くのではなく、研究開発校が実践した多様なA Lを体験的に学べるようにしている。



写真2 研究開発校以外の7校が、自校の実践をポスターで発表。自主的に発表した高校のほか、よい実践を行っている学校として高校教育課から依頼された高校が発表した。



写真3 研究開発校による分科会では、国語や英語、保健体育や家庭など、様々な教科の実践が発表された。模擬授業を行い、実際に授業で行った指導法を体験してもらう分科会も多かった。



写真4 全体会でも、席が近い者同士で4～5人のグループとなり、自分自身や学校全体での授業改善の実践内容を発表し、共有し合った。

み、これまでの指導が否定されているのではなく、急激に変化している社会に応じて、授業も改善していく必要があると説明した。

「授業改善を一方的に求めると、現場は否定的な思いを抱いてしまい、すし、何のためのA Lなのか腑に落ち

なければ、例示された授業の流れを単になぞるだけになるでしょう。教育目標や校訓に即した生徒を育てるためにはどのような授業をすればよいのかを、各校が考えられるよう問いかけています」(瓜生主任指導主事)

そして、学生時代にA Lの視点を

取り入れた授業の経験が少ない教師でも、授業をイメージできるよう、説明とともにそれらを体験する場を設けた。例えば、3人1グループとなり、A Lの3つの方法をジグソー法(※2)で共有した後、各自、授業で取り入れたい方法や視点を発表し、最後に振り返りを行うといった内容だ。

「生徒が自分の言葉でアウトプットする場面をつくることから始めましょうと伝えました。授業の最後の5分間に振り返りのペアワークを行うのもA Lであり、学習のねらいによつては講義中心のA Lもありうる」と説明しました」(瓜生主任指導主事)

体験を重視した研修は授業改善の必要性やポイントに気づきやすいと好評で、どの学校でも参加者は熱心に取り組んでいた。

「担当教科が異なるようにグループを組むと、他教科の指導の様子が分かり、教科の枠を超えて授業改善を考えられるという効果もありました」(高野主任指導主事)

そうした評判が県内に広まり、任意の研修にもかかわらず申し込みが増え、3年間で80校もの学校が研修を実施した。さらに、初任者研修や教職5年研修などにも、同様の研修

内容を盛り込み、A Lの視点からの授業改善の裾野を広げていった。

成果と課題

県全体で学び合う文化を築き、授業改善をさらに推し進める

今後の課題は、実践の評価指標を作成して各校の成果を可視化し、さらなる授業改善の普及につなげることだ。実践発表会で研究開発校以外の高校がポスター発表をしたり、県外からの視察が増えたりするなど、手応えは得られている。また、17年度からは、研究開発校以外の実践を紹介する「ふくおかA L通信」を発信している。

「社会が大きく変わる中で、学習観や指導観も変えていくべき点があります。しかし、それは1人でできるものではありません。一部の教師だけでなく学校全体で、そして校内だけでなく学校を超えた形で授業改善に取り組むことで、大きな変化を起こせるのだと思います。学び合う文化を県全体で築き、主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善がすべての学校・先生方に広まるよう、各校を支援していきたいと思っています」(瓜生主任指導主事)

※2 ジグソーパズルを解くように、協力して全体像を浮かび上がらせる協調学習法の1つ。ある課題について、複数の視点で書かれた資料を読む「エキスパート活動」、そこで得た知識を交換し、考えを深めていく「ジグソー活動」、全体でグループの意見を交換する「クロストーク活動」の3つの活動から成る。

2018年2月号へのご意見

多面的評価は、生徒の資質・能力の本質に迫るもの

特集を読み、東京都立町田高校の牛来峯聡統括校長の「多様な資質・能力を身につけた生徒が、大学が用意している多様な入試に対応できるというストーリーを描くことが、高校に求められる役割」という言葉に強く共感した。次期学習指導要領や高大接続改革があるから多面的評価を行うというのでは本末転倒だ。多面的評価は、その学校で生徒に育む資質・能力の本質に迫るものだと思えている。

北海道札幌藻岩高校 長井 翔

教師間で評価のベクトルをそろえる

特集を読み、今後、eポートフォリオの活用がさらに広がるのではないかと予想している。実践事例1にあったように、生徒が実験に失敗したことを「目標未達成」と判断(評価)せずに、自ら考えて実験し、論理的に考えることができた(評価(記録))できるように、多面的評価を実施するにあたり、教師間で評価のベクトルをそろえることが重要だと感じた。

東京都・私立東京農業大学第一高校・中等部 小堀健一

場づくりがあってこそその活動

「実践 アクティブ・ラーニング」の森先生の実践を読み、授業中の生徒の脳をアクティブにするために、厳密に時間を管理して脳に負荷をかけるという点に大変共感した。そうすることで、生徒は時間内に考えようとする癖がつくと思う。また、気心が知れた仲でも、挨拶をきちんとさせるなど、互いを認め尊重し合うような場づくりについても共感した。どのような活動も場づくりありのものであり、そうした感覚は大切にしなければならないと思った。

山形県立米沢工業高校定時制 高橋英路

班ごとの活動で幅広く生徒を指導する

「実践 アクティブ・ラーニング」の都築先生の実践で紹介された、班ごとに実験を行い、その過程と結果を共有・発表するという点から、指導のヒントを得た。個別学力検査対策では個別の添削指導が効果的だが、志望校が固まる前の指導を模索していた。班ごとにレポートや課題に取り組みせ、それを添削することで、より多くの生徒を指導することが可能になると思った。

茨城県 匿名希望



教育ちょこっとトーク

テーマ

新入生にかけたい言葉

・挑戦するか迷ったら、まずは挑戦してみよう！

長野県

・君たちは「新たな学び」の体現者だ。

北海道

・これからの時代をリードするのは、君たちだ。

茨城県

・3年間、たくさん挑戦をしてたくさん失敗をしましょう。

東京都

自分を変えた言葉を募集しています！

「教師を育てた言葉たち」(左ページ)のコーナーでは、取材にご協力いただける先生を募集しています。「あの一言で指導観が変わった」「あの一言が自分を成長させてくれた」という言葉と、それにまつわるエピソードをお待ちしています。

〈個人情報の取扱について〉をご確認いただき、
必要事項①～④をご記入の上、
下記のe-mailアドレスにご送信ください

- ①学校名・お名前 ②分掌・ご教職歴 ③紹介したい言葉
④エピソード(どんな時に言われた or 出合った、それによって自分がどう変わったのかなど)

view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

〈個人情報の取り扱いについて〉 この「教師を育てた言葉たち」の言葉募集でご提供いただく個人情報は、今後の企画を検討する目的で利用いたします。お客様の意思によりご提供いただけない部分がある場合、手続き・サービス等に支障が生じることがあります。また、商品発送等で個人情報の取り扱いを業務委託しますが、厳重に委託先を管理・指導します。個人情報に関するお問い合わせは、個人情報お問い合わせ窓口(0120-924721、通話料無料、年末年始を除く、9時～21時)にて承ります。
(株)ベネッセコーポレーション CPO(個人情報保護最高責任者)
上記をご承諾くださる方はご送信ください。

編集後記

今号の「VIEW'S REPORT」のコーナーで取り上げた福岡県立学校「新たな学びプロジェクト」では、福岡県教育センターを訪れ、インタビュー後、特命プロジェクトチームの定例会議も取材させていただきました。記事でもお伝えしたチームメンバーによるグループワークは、とても和やかな雰囲気、メンバーの関係性のよさを感じました。どのグループもメンバーが協働し、それぞれの形でしっかりアウトプットされていたことにも、メンバー一人ひとりの高い主体性が表れていました。まさに、「これからの会議・研修のあり方、つくり方」のコーナーでも追求する、自由な対話による会議が実現されていると感じました。(柏木)



VIEW21 高校版 2018 6 月号

次号は 6 月 20 日発行(予定)

『VIEW21』高校版は年 6 回の発行です

教師を育てた 言葉たち

No. 007

神奈川県立横浜南陵高校

半田昌孝先生

はんだ・まさたか

◎教職歴33年。同校に赴任して2年目。統括教諭。国語科、キャリア支援グループリーダー。

神奈川県立横浜南陵高校 全日制／普通科／共学／1学年約240人／2017年度進路実績（現役のみ）：私立大は、専修大、中央大、日本大、法政大、明治学院大、明治大、神奈川大などに延べ179人が合格。短大、専門学校進学55人。就職6人。



初 任校での2年目、初めて担任として受け持った1年生のクラスに、A君がいました。彼は、遅刻などの理由で頻繁に指導を受ける生徒でしたが、ご両親は「学校の指導が悪い」「うちに原因はないのだから、家庭訪問は不要」といった態度で、家庭との連携は困難な状況でした。それでも私は、毎日意識してA君に声かけを続け、A君も私の言葉には耳を傾けてくれました。遅刻せずに登校できた時、「頑張ってるな！」と声をかけると笑顔で応えてくれるなど、彼との関係性は維持できていましたが、生活態度はなかなか改まりませんでした。2学期の半ばを過ぎた頃には、クラスから「なぜ、Aは遅刻してばかりいるのに許されるのか？」と不満の声が出てくるようになり、A君のことでクラスに学校への不信感が広がっていく危機感を覚えました。

このままではいけない、しかしどうすればよいのか分からない……焦燥感に苦しんでいたある日、日頃から私とクラスの様子を気にかけてくれていた学年主任のG先生が、私にこう言ってくれたのです。「**変化をすぐに求めるな**。しかし、自分の信念は貫きなさい。いつかきっと生徒に伝わるから」。G先生の言葉を聞いた瞬間、はっとしました。それまでの私は、自分の教科指導も、そして生徒の成長や態度にさえも、結果が出ることを急ぎすぎていたのかもしれない。G先生の言葉で、教育に対する考えが深まった思いがしましたし、「きっといつか分かってくれる」と思いながら、生徒たちの前に立てるようになったことで、とても気持ちが楽になったことを

今でもはっきりと覚えています。

結 局、その1年間では、A君には大きな変化はありませんでした。そこで私は、もっとじっくりA君とつき合ってみようと思い、「2年生でもA君の担任をさせてください」と、2年生のクラス編成について決める学年会議で自ら申し出たのです。

2年生になってもA君は相変わらずでしたが、もはや私に焦りはありませんでした。「2学期の修学旅行の頃にはみんなと打ち解けられるといいなあ」と見守っていたところ、2年生の後半にはA君はずいぶん落ち着いてきたのです。そして冬には、A君のご両親が、私の家庭訪問を受け入れてくださいました。少し緊張しながらA君の自宅を訪れた私を、ご両親は「半田先生、2年生でもAの担任になってくださり本当に感謝しています」という言葉で迎え入れてくださったのです。2年かかりましたが、教師として大切な気づきを得られたように思いました。

3 年進級時にはクラス替えがないため、生徒たちを卒業まで見続けるつもりでしたが、残念ながら翌年度は他校に異動することになりました。修了式の後、クラスの生徒たちが寄せ書きをくれたのですが、代表して私に色紙を渡してくれたのがA君でした。「俺が渡す！」と彼が名乗り出たのか、それとも「Aが渡せよ！」とクラスのみんなが彼に勧めたのでしょうか。少し恥ずかしそうに、そしてぶっきらぼうに「はいっ」と私に差し出した色紙には、「このクラスは俺に任せておけ！」という彼の言葉がありました。

VIEW21を Benesse High School Onlineでも ご覧いただけます。



VIEW21の
バックナンバー
を読みたい



VIEW21を
より多くの先生
で読みたい

過去の冊子がお手元にない場合や、
より多くの先生でご共有されたい場合に、
ぜひBenesse High School Onlineを
ご利用ください。



アクセ
ス方
法

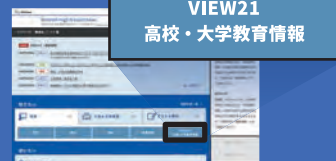
1

各種検索エンジンで
「ハイスクールオンライン」
と入力して検索

ハイスクールオンライン 🔍 検索
ご利用には、学校ID/ログインコードもしくは
先生個人ID/パスワードが必要です。

2

ハイスクールオンラインにログイン後、
トップページの「知りたい」>「指導」>
「VIEW21」をクリック



VIEW21 公式アカウント LINE@

最新情報や時期ごとにオススメのコンテンツをLINEで配信！右の2次元
コードを読み取っていただくか、「友だち追加」にて「@view21」でID検索
して、「VIEW21」公式アカウントのLINE@を友だちに追加してください。

@view21 でID検索! 🔍



ハイスクールオンラインに関するお問合せ

WEBサポートデスク 通話料無料

0120-350124

受付時間/月～金 8:00～19:00 土 8:00～17:00 (祝日、年末・年始を除く)

VIEW21

ビュー21 高校版 Volume1 2018年4月号
2018年4月16日発行/通巻第369号 発行人 山崎昌樹 編集人 春名啓紀 発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
VIEW21編集部 〒163-0415 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング13階
© Benesse Corporation 2018

お客様
サービスセンター

【フリーダイヤル】 **0120-350455**

受付時間 月～金 8:00～19:00/土 8:00～17:00 (祝日、年末・年始を除く)

株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社 〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17